
ジャージを着た女神

あびす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャージを着た女神

【Nコード】

N5590T

【作者名】

あびす

【あらすじ】

目が覚めたら、そこは異世界。しかも戦争中。しかも超劣勢。何これ、なんてラノベ！？ でも来ちゃったものはしょうがない。こう見えてもミリオタだし、頼れる人もたくさんいるし、一つ色々と知恵を出してみましようか！ ◆異世界召喚モノ。チート能力なし、ファンタジー分薄め。 ◆他の作品とはハイパーリンクになっています。 ◆正々堂々？ 何それおいしいの？ ◆例によって不定期更新です。 ◆九州訛りは怪しいです。

#0・流浪の姫將軍

ハイランド帝国・ソプニカ諸侯連合国境　ブリュス郊外

晩秋の夕暮れ時。

ブリュス郊外の森林には、満身創痍の軍隊がいた。兵士の数は、見たところ千人にも満たない。どの兵士も傷を負っており、生気はなく、とぼとぼと歩いているだけだ。

その中心に、騎乗した美しい女性がいた。見たところ二十歳過ぎで、鮮やかなプラチナブロンドの長髪に青い瞳をした、穏やかそうな顔つき。それに加え、白と青で彩られた鎧と、紺色のマントに白抜きで描かれた桔梗の花とが、高貴な雰囲気醸し出している。だが、この女性も例に漏れず元氣のない表情をしている。

ブリュス領主、マリオン・ユーティライネンの妹、ラナ・ユーティライネンである。

「……姫將軍」

側近の呼びかけに、ラナは顔を上げた。

「……どうしました、アドルフ」

アドルフと呼ばれた側近はラナの横に馬を進め、頭を垂れた。見た目は三十過ぎの男性で、がっちりした体格に加え、顎を覆う短い髭がどこか無骨な印象を与える。纏っている黒い鎧には疵が目立ち、彼が歴戦であることを示している。

「脱出できた兵は、わずか八百の様です」

「……キーラは？」

「キーラ様は先行してカレワラに向かわれました。カレワラのミカ殿に救援要請を行っておくそうです」

「そうですか……。私が至らぬばかりに、迷惑をかけますね」

「そのようなことはございませぬ。兵力に差がありました。それに、ハイランドにかなりの出血をさせましたから、少しは進軍も鈍るでしょう」

しょんぼりと頭を垂れているラナを励まそうとするアドルフだったが、その声には無念さが混じっている。

隣国のハイランド帝国が、ここソプニカ諸侯連合に宣戦布告と同時に侵攻してきたのは一ヶ月前のこと。ソプニカ諸侯連合の領土は大陸の北東に位置する半島となっており、ハイランド軍は南のブリュスト、西のエピードの二方向から侵攻を始めている。エピードは陽動、ブリュスが本命であった。

第一目標であるブリュスに押し寄せてきたハイランド軍の兵力は二万に達し、それに対してブリュスを守る兵力はわずか三千。中央政府に出ていた姉の代わりにラナが指揮を執り、籠城を続けたものの、ついに落城。現在は隣の城であるカレワラに退却中だ。妹のキーラは先行してカレワラに向かっている。

「父上はわずか千人でハイランド軍一万を押し返したというのに……。情けない話です」

ハイランドは過去にもブリュスに侵攻していた。その時はラナの父が奮戦し、玉砕と引き替えにハイランドの侵攻を食い止めている。そのときラナはまだ幼く、記憶には残っていなかったが、アドルフから何度も言い聞かされて育てられてきたため、父のことは誇りに思っている。

野戦でハイランド軍を抑えたという父ほどの指揮はできなかったが、ブリュスは堅城であり、アドルフの補佐もあってか、今回もハイランドには兵四千ほどの損害を与えている。その出血を賄うため、また、地盤固めのために進軍は一時停止するに違いない。その間に、カレワラを守るミカ・キンクネンと合流し、戦力を立て直すことが現在の目標である。

「……この危機を脱するには、普通の戦い方ではいけませんね……」
圧倒的な兵力、ひいては国力の差。起死回生を期すには、古今東

西に例を見ないような、奇抜な戦術を思い付く者が欲しい。
ラナはため息をつき、軍を進めた。

#1・最後の晩酌

日本・Y県S市

秋も終わりを迎えつつある、十一月半ば。

その女性は風呂から上がり、部屋着として使っている高校指定だった紺色のジャージを着た。身長はそこそこ、スタイルもまあまあ、髪は暗めの茶色をしたロングヘアで、顔の造りも中の上程度と、外見的な特徴は少ない。

S市の大学に通っている大学二年生、白雪深雪しらゆきみゆきである。出身は隣のF県であるが、現在はここS市で一人暮らしをしている。

今日は金曜日。時刻はそろそろ十時。ガソリンスタンドのアルバイトも明日は休み。深雪は上機嫌で冷蔵庫から缶ビールを取り出して、コタツに潜る。テレビに繋いでいるDVD再生機能付きのゲーム機にレンタル店から借りてきた映画のDVDをセットし、再生開始。彼女の習慣である、映画占いだ。週末に全く知らない映画を借りて、それが面白ければ来週はいい一週間。そんなささやかな娯楽である。

予告編の間に缶ビールのプルを開けて、風呂上がりの喉にそそぎ込む。それはアルバイトで疲れた体に効果てきめんで。

「……ぷはーっ！！ この瞬間のために一週間生きてるわぁ……」
なんて、おっさん臭いことを呟いてしまう。まあ、自分が年頃の女性らしくないことは自覚しているのだが。

何せ、本棚に並ぶ雑誌は歴史モノ。それも戦史や戦術を取り扱った、中身の濃い雑誌である。隔月発行のため、近所の本屋で定期購読を申し込んでいるが、毎回店員から変な顔をされる。

それだけならまだしも、本棚に並ぶ文庫本はどれも歴史か軍事関

係のものばかり。

そう。深雪は歴史オタクにして軍事オタクであった。その趣味のせいか、滅多なことでは女性扱いされない。大学進学当時は隠そうとしていたが、些細なことでボロが出てしまうので、今では隠す気はない。女性扱いされなかったのは腕白だった子供の頃からだし、もう慣れている。悟りを得たと言えは聞こえはいいが、諦めといったほうが的確だ。

映画の内容といえば、ゾンビから逃げるだけのB級、いや、Z級と言ったほうが的確な、ぶっちゃけた話、突っ込みどころ満載のクソ映画であった。酒のテンションのおかげで見れているようなものだ。素面では到底見られそうにない。これだと来週はあまりいいことがなさそうな気がする。

ふと、携帯電話の着信音がした。ハイレベルな演奏技術に加え、怪談調のおどろおどろしい歌詞。そしてそれを歌うのは綺麗な声をした女性ボーカルというギャップが売りのメタルバンドの曲である。非常にマニアックなバンドであり、かなり苦勞して探し出した着信音だ。

携帯電話の画面をタッチして、相手を確認する。

『ちーちゃん 080・〇〇〇〇・××××』

深雪は一気に笑みを浮かべた。小学生の頃からの付き合いであり、今でも一番の親友と言い切れる、千代田千歳ちよだちちせ。高校まで一緒だったが、現在はF県内にある、レベルの高い大学に通っている。秀才のうえにおしとやかで頑張り屋さん。それに加えて容姿も整っており、非常に女性らしい人だ。昔から女性扱いされなかった深雪からすれば、千歳は同級生でありながら、憧れの女性だったのである。

千歳と話すのは久しぶりだ。ウキウキしながら電話に出る。

「もっしー!」

『あはは、元気そうだね、みゆ。久しぶり。今は大丈夫?』

「うん、大丈夫だよ。映画観てるけど、つまんなすぎて泣きそうだよ!」

『映画っていつものやつ?』

「そうそう。映画占い」

『じゃあ来週はいいことないかもね』

受話器越しに千歳がくすくすと笑ったのがわかった。大学入試の受験勉強の合間に息抜きとして始めた映画占い。高校在学中は千歳にも何回か話していた。

「そうだよー。あ、でも、ちーちゃんと話せたから、来週はいい一週間になるかも!」

『はいはい。じゃ、たくさんお喋りするために、用件は早めに伝えとくね』

「はい、お願い」

『みゆはお正月に帰ってくるの?』

「うん、帰るよ。なんたって、ちーちゃんに会いたいからね!」

『あはは、私も会いたいよ。よかった、帰ってくるんだ』

帰省したときはいつも千歳と遊んでいる。小中高と同じ学校のうえ、中高では部活も一緒だった関係上、共通の友人ばかりであり、必然的に一緒にいる時間が増えてしまうのだ。

「うん。二十九日までバイトあるから、三十日の朝方から帰るつもり。成人式までそっちにいたいなあ」

『どうやって帰るの? やっぱバイク?』

深雪は普通車免許よりも先に自動二輪免許を取得しており、現在の足は先輩より譲り受けた二百五十cc単気筒。スペックの低い下駄バイクなので、高速道路を走るのは恐ろしいが、下道をトコトコと走るだけでも非常に楽しい。夏休みの帰省はバイクであり、千歳を後ろに乗せて小旅行を楽しんだものだ。

「うーん、一応バイクって考えてるけどね。寒くなかったらいいけど。それで、正月って何があるの?」

『うん。三日に辛木中の剣道部の同窓会やるの。あと、五日に辛木からき小六の二の同窓会も』

「へえー! 同窓会!」

『剣道部のほうは何人か連絡取れなかったけど、六の二のほうは六割ぐらい返事来てるって。来島先生も来てくれるし、さっちゃんとかエド君とかも来れるみたい』

「あれ、エド君ってイギリスに留学してなかったっけ？」

『わざわざ帰国してくれるんだって。きっと英語ペラペラだよ』

エド君こと、エドワードこと、角田洋一。同級生の中では一番の秀才で、今ではイギリスに留学している。顔立ちも氣立てもよく、一番人気の男子だった。

「キサ君も懐かしいなあー。まだ霞さんと続いているの？」

『うん。今は同棲してるんだって。相変わらずラブみたい。羨ましいなあ』

さっちゃんこと、キサ君こと、如月皐月。千歳の初恋の相手だったが、先約があったので、見事に玉砕。その時に付き合っていた女性との関係は今でも続いているらしい。

「確かに羨ましいなあ。あ、でもちーちゃんにはあたしがいるから！」

『あはは、みゆが相手なら、遠距離恋愛になっちゃうよ』

二人はしばらくの間、思い出話に花を咲かせる。高校を卒業して二年も経てば、友人が置かれている状況は変わってくる。県外に就職して、なかなか帰ってこない者。大学に入って急にキャラが変わった者。ニート生活を送っている者。そして音信不通の者。千歳はそういう情報をたくさん持っていて、深雪が氣になっていたことは次々と晴れていった。

どれぐらい話しただろうか。映画はとうの昔に終わり、深雪の晩酌も缶ビールが一本空いて、テーブル上にある麦焼酎のお湯割りはこれで二杯目だ。日付も変わって、短針も倒れ始めていた。

「ふああ……。ちよつと眠くなってきちゃった」

疲れと酔いが混じってきて、瞼が重い。それは千歳も同じようだ。

『うん、私も眠いなあ……。』

「じゃ、そろそろ寝よっか。また今度ね」

『うん、おやすみ』

「おやすみ」

深雪は電話を切ると、あくびをしながらベッドに潜り込み、電気を消した。

睡魔はすぐにやってきた。

#1・最後の晩酌（後書き）

千代田千歳です。

みゆとは小学校からの親友で、部活も一緒でした。

一緒に自主練したり、買い物したり、キャンプに行ったり。

……なんか昔のこと考えてると、ちょっとしんみりしてきちゃった。
早く会いたいなあ。

……って、忘れてた。

次回 「目覚めた先は」 お楽しみに！

同窓会、楽しみだなあ。

#2・目覚めた先は

くソプニカ諸侯連合・カレワラ

深雪が目を覚ますと、そこは別の部屋だった。粗末なベッドはるかふかのベッドに変わっており、ライトブルーだった掛け布団も、真っ白なふわふわの布団に変わっている。

夢を見ているのかな。深雪は上体を起こして、目をぱちくりさせる。殺風景だった部屋の中は、いかにも中世風のロマンチックな内装になっている。

そして、ベッドの隣には銀髪の美少年。見たところ一二・三歳か。侍女を伴っていて、中性的な、育ちのよさそうな少年である。

「あ。女神様、起きたね。ねえ、フィリップを呼んできて」

少年が口を開くと、側にいた侍女らしき女性が部屋を出る。声変わりとしてはいないところを見ると、十一・二歳ってところだろう。

「女神様？」

聞き慣れぬ単語に、深雪は目を白黒させる。女神って、自分のことだろうか。周囲を見渡してみても、この部屋には自分と少年しかない。

自分は女神ってガラではないし、まさかこの少年は見えてはいけないものが見えるタイプなのか。

「あ、申し遅れました。僕はミカ・キンクネン。ここカレワラの領主だよ」

「あ、丁寧にどうも……。あたしは白雪深雪っていいです」

ミカはどう見ても年下だったが、領主という単語に思わず敬語を使ってしまう深雪だった。

ミカという名前で、目の前の彼は少年ではなく少女だったのかと

思ったが、考えてみればミカという名前は北欧の男性に使われている。ということは、ここは北欧なのだろうか。

というか、ここはどこで、なんで自分は日本からここに飛んできたのだろうか。夢にしては物のディテールや感触が詳細すぎる。頭の整理がいまいちつかない。

「シラユキミユキ？」

「あ、深雪でいいです」

白雪深雪という名前に首を傾げているところを見ると、ここはやはり日本ではないようだ。

とりあえず下半身を布団から出して、ベッドに腰掛ける。立とうかと思ったが、床は石で、靴もないため、腰掛けたままにしておくことにした。

「失礼する」

男の声。それと共に、部屋の扉が開く。

部屋に入ってきたのは、四十歳ほどに見える赤毛の男。やや小柄ながら、その体は引き締まっており、顔つきの鋭さと併せて、獲物を狙う虎のような印象を受ける。

「来たね、フィリップ。女神様、目覚められたよ」

「……ミカの補佐をしている、フィリップ・ライオネスと申す」

「ど、どうも。白雪深雪です」

フィリップと呼ばれた男の表情は険しい。彼の表情に気圧されるが、いい加減に疑問を晴らすべきだろう。

「……あ、あの……」

「なあに？」

「女神様、ってどういうことですか？ あたし、ただの学生です。それに、ここはどこなんですか？」

深雪の言葉で、ミカは目を点にした。その横で、フィリップは失笑を浮かべている。

「だから言っただろう。神頼みなど、しても無駄だとな。全く、中央は無駄金ばかり使う」

「でもフィリップ、ミュキ様は栗色の髪だし、青い衣を纏ってる……」

「たまたまだろう。なあ、ミュキ殿？」

「は、はあ。髪は染めてるだけですし、服もこれ、ただのジャージ……」

しょんぼりしているミカを見ると、言っただけでなんだか申し訳ない気分になってきた。

「異国の女性、ミュキ殿。大変申し訳ないことをしましたな。中央の術士が余計なことをしたかゆえに、勘違いしてしまいました。しばらくごゆるりと休息されてください」

フィリップが頭を下げた。彼は深雪のことを旅人と思ったらしい。細かいことはよくわからないが、口調からしてフィリップは迷信を嫌うようだ。

「あ、あの……」

「なんですかな？」

「ここ、どこなんでしょう？」

フィリップが少し呆気にとられたような表情を浮かべた。ミカが壁にかかっている地図を指差す。

「ここはカレワラ。地図だと……ここだね」

壁にかかっている地図は、明らかに地球のものではない。形が全然異なる。

違う世界に召喚される。アニメやライトノベルなんかでよく見るシチュエーションだ。頭の整理がつかないので、こっそり太股をつねってみると、普通に痛い。やっぱり夢じゃない。

「……違います」

「何が？」

「あたしの知ってる地図と違います。なんていうんだろう、国が違うとか、そんなレベルじゃないです。世界が違います」

深雪の言葉に、フィリップは啞然とし、ミカは瞳を輝かせた。

「……では、ミュキ殿の言葉が正しいのなら、中央の術士は、女神

を召喚するつもりが、違う世界の学生であるミユキ殿を召喚した、と？」

「そういうことができるのか、全然わかんないんですけど、その節が強いんじゃないですか？」

「……中央の間抜けが。対応を誤っただけでなく、全く関係のない者まで巻き込むとはッ!!」

フィリップの口調が荒くなった。どうやら自分は全くの手違いでここに送り込まれたらしい。

とりあえず何が起きているのか把握したい。フィリップに聞いてみることにしよう。

「あの、何が起こってるんですか？ 女神を召喚とか、対応の誤りとか、ただ事じゃないってことはわかるんですが……」

「……そうですね。巻き込んでおいて、何も説明しないのはあんまりでしょう。ミカ、説明できるか？」

「大丈夫だよ。僕だって領主だからね」

ミカは胸を張ると、壁の地図を指差した。

「僕達カレワラは、周囲の都市と『ソプニカ諸侯連合』っていうのを組んでるんだ。最近南のハイランド帝国が力を伸ばしてきたから、自分の身を守るためにね。」

そしてある日、鉾山を視察してたハイランドの使者が落盤に巻き込まれて死んじゃったんだ。この時は賠償だけで済んだんだけど、ハイランドとの関係がぎくしゃくしてきちゃって。

で、ハイランドの皇帝が代わったとたん、ハイランドはブリュスっていう都市の割譲を要求してきた。その代償として示されたのは、すっごく寒いうえに、周りは森しかないっていう、人の住める環境じゃないとこだった。ブリュスは豊かな都市だし、城も堅い。そんなの受け入れられないじゃない。中央政府はそれを断ったの。

そしたら、ハイランドは怒っちゃって。使者が死んじゃったのはこっちの陰謀ってことになって、一ヶ月前に宣戦布告と同時に、ブリュスとエピソードに攻めてきた。今はラナって人がブリュスで食い

止めてるんだけど、落ちるのは時間の問題ってとこ。

……どうかな、フィリップ？」

「まあ、及第点だ」

ミカの説明は、どこか第一次ソ芬戦争―俗に言う「冬戦争」―を思い出させるものだった。大国に理不尽な欲求をふっかけられて、断ると戦争。現場ではどうすることもできず、中央を恨むしかできないのだろう。

「付け加えるなら、我々には鉱物資源が豊富。拡大主義を採っているハイランドとしては、鉱物資源は喉から手がでるほど欲しいものだろう。前の皇帝はハト派だったからよかったもののな。……あ、ミュキ殿、失礼しました」

フィリップがなんで謝っているのか、深雪は一瞬理解できなかった。どうやらミカに言い聞かせているつもりで、深雪に普段の口調で話しかけたのを謝っているようだ。

「いえ、普通に話してもらえるとありがたいです。フィリップさんみたいな年上の人から敬語使われると、なんだか気まずいっていうか……」

フィリップが年上というのもあるが、彼の体格や顔つきが厳ついというのも大きい。

「ミュキ殿がそう言われるのなら、失礼して。ブリュスのラナ殿は粘っているが、落城も時間の問題だろうな。各都市は兵力を温存するように中央から命令が出ている。兵力で劣る上に、援軍の禁止だ」

「……孤立した拠点は落ちるしかないですからね。解囲が動かせないとなれば、ひたすら籠もるしかありません。でもブリュスが堅城ってことは相手も知ってるでしょうし、それ相応の準備はしてるはずですよ」

悪い癖が出てしまった。それも本職相手に。

だが、深雪の言葉に、フィリップは少々驚いたようだった。

「あれ、あたし、何か変なこと……」

「いや、正しい。……ミュキ殿、我々はどうするべきか、貴女の考

えを聞かせて欲しい」

フィリップの口調は、深雪を値踏みしているようだった。彼の期待に添えるかどうかはわからないが、今まで蓄えてきた知識を試す場かもしれない。

籠城だけではどうしようもない戦いがあることを、深雪は知っていた。この世界の戦争がどのようなものかわからないが、敵の兵力が集まらないうちに各個撃破というのは古今東西同じだろう。なら、それをさせないためにはどうすべきか。とりあえず言ってみることにしよう。

「……細かいことがわからないので、なんとも言えませんが。

一度ブリュスを抜かれれば、勢いに任せてこのまま各個撃破されていくのは目に見えてます。ひとまず周囲の兵力をブリュス付近に集結させ、城内と呼応して解囲を試みる。もしくはハイランドの後方連絡線を襲撃し、補給を絶つ。

兵力なんかの細かい情報がないので可能か不可能かはわかりませんが。どちらにせよ拠点間で連携しないことにはどうしようもないと思います」

フィリップの反応を窺ってみると、神妙そうな面持ちで腕を組んでいる。まさか怒らせてしまったのか。深雪は緊張する。

「……ミユキ殿。貴女は本当に学生か？」

どうやら褒めてくれたようで、とりあえず一安心。

「へ？ ……まあ、一応は。趣味で歴史や軍事を学んでいますけど、独学で……」

「失礼します！！」

深雪の言葉を遮るように、兵士が駆け込んできた。着ている甲冑は中世風で、腰には剣を佩いている。用いられている技術はそう高くないように見えた。

「どうした？」

「ブリュスのキーラ様が見えられています！ 至急、ミカ様とフィリップ様にお会いしたいと！」

「キーラが？ ……嫌な予感がするね」

「ああ。ミカ、行くぞ。ミュキ殿、後でまた話を聞かせていただく」

「あ、はい」

「ミュキはここにいてね。トイレに行きたくなったら、部屋の外に衛兵がいるから聞いてみて。履き物も置いとくから！」

ミカが慌ただしくスリッパを準備する。そして、ミカとフィリップは部屋を出て行った。

二人の足音が遠ざかると、部屋の中は静かになった。とりあえずスリッパを履いて、壁に掛かっている地図を見してみる。知らない文字で書かれていたが、なぜか読めた。カレワラの周囲を見ると、見事なまでに森ばかり。道はそう広くないようで、大軍を動かすのは難しそうだ。

って、何で馴染んでいるのだ。違う世界に呼び出されたっていう異常事態の真っ直中じゃないか。

『いやー、見立てが当たったわねー』

女の声をした。周囲を見渡してみると、先ほどまでは何もなかった空中に、妙齢の女性が浮かんでいた。髪も瞳も真っ黒で、美人ではあるが人形のような感覚を受ける。

「……な、何、あなた」

腰を抜かしそうになるのを抑え、とりあえずその言葉だけを絞り出す。

『私はセシリア。この世界で神様やってるわ』

「はあ、セシリアさん……。って、神様!？」

突然のことに、思わず大声が出る。そんな深雪を制するかのよう

に、セシリアは指を突きだした。

『大声出しちゃダメ。外の人が来ちゃうでしょ。今の私はあなたにしか見えてないんだから、かわいそうな人扱いされちゃうわよ』

「……りよ、了解」

『いきなりこの世界に呼び出したりなんかしちゃってごめんなさい

ね。女神様を呼び出して、って生贄まで捧げられちゃった身としては、引くに引けなくて。生贄の娘もタイプだったから、ちよつと頑張らなきゃね』

「え、あたしが呼び出されたのって、セシリアさんの都合!？」

いきなりの第一当事者の登場。そして彼女の言葉から感じられる投げやり臭。全く積極的でないようだ。

『まあ、そんなことになるわね。苦勞したわよ、伝承どおりの人を探すの。女神様は人間の創作で、實在しないんだから。栗色の髪で、青い服。それに呼び出すなら役立ってもらわなきゃ困るから、相応の知識を持った人。それはあなたぐらいしかいなかったのよ』

神様が身勝手っていうのは、神話や小説でよく知っていたが、まさか自分が巻き込まれるとは思わなかった。まあ、女性でミリオタというのはなかなか出てこないだろう。

『まあ、一区切りついたら、元の世界に帰してあげるわよ。あなたが元いた場所に、元いた時間にね』

「一区切りって？」

『この戦争が終わったら。勝とうが負けようがね』

ずいぶんと投げやりだ。神様なんてのはこんなものだろうか。

『まあ、あなたのサポートはさせてもらおうわよ。文字読めるでしょ？ それは私の魔法』

「……サポートできるんなら、この時代の戦争がどんなのか教えてくれる?」

『あら、ずいぶんと前向きじゃない』

「まあ、呼び出されたからには何かしないとね。どっちにしろ、戦争が終わらなきゃ帰れないんでしょ?」

戦争が終わらなきゃ帰れないのなら、戦争が早く終わるように頑張るのが一番手っとり早い。幸い、フィリップは物分かりがよさそうだ。何を言っても、とりあえずは聞いてくれるだろう。そして、少しわくわくしている自分にも気付いていた。

『そうね。技術レベルはあなたの世界でいう十一世紀ぐらい。投射

武器は弓矢だけ。騎兵の突撃で戦闘が決まる感じがしらね。今はあなたの世界でいう十一月。もう冬ね。ここらは結構雪が降るわよ』

セシリアの言葉で、状況はなんとなく理解できた。冬が近いのに攻めてくるとは、ハイランドはソプニカを甘く見ているようだ。セシリアの言葉によれば、兵糧の輸送はせいぜい馬匹。もしくは現地調達だろう。カレワラの周囲は森林が多く、騎兵は有効に使えない。やれることはいくらでもある。

『魔法は一応存在してるけど、まだ未発達ね。着火が関の山。使える人もそういないから、ないものと考えてもらっても構わないわ』
違うところはそれぐらいか。なんてことはない。中世の戦争と同じだ。

「……ありがと。だいたい把握したわ」

『どういたしまして。さて、そろそろお暇するわ。必要になったら、いつでも呼んでね。だ・け・ど！ 一人の時に呼ぶのをすすめるわ』

「了解。あたしもかわいそうな人だって思われたくないし」

セシリアはくすくすと笑うと、一瞬で姿を消した。いろいろと問題がありそうな神様だが、とりあえず頼れるものには頼っておこう。とりあえず、早いところ終わらせて、パパッと帰る。それに限る。

「ミュキ、入るよ」

ミカの声。深雪は女神じゃないということがわかったので、普通に話すこととしたのだろう。深雪としてもそのほうがありがたい。

「あ、はい、どうぞ」

部屋に入ってきたのはミカとフィリップ。それにもう一人、金髪の少女がいる。見たところ十五歳ほどか。どこことなく汚れた感じがするが、顔のベースは整っている。プラチナブロンドのショートヘアに、やや吊り目気味の青い瞳。ボーイッシュな雰囲気をする女性だ。

「紹介するね。この人がシラユキミュキさん。別の世界から来た人」
「へー、そんなことが本当にあるとはね。僕はキーラ。キーラ・ユ

ーティライネン。よろしく」

「あ、どうも。深雪でいいですよ、ユーティライネンさん」

「やだな、もう。キーラでいいよ。それに、ミュキさんは僕よりも年上なんだから、普通に喋って」

「あ、それは僕もお願い。ミュキは別の世界の人だから、領主とか関係ないよ」

えらくフレンドリーな二人だ。そこまで言ってくれたのなら、無視するわけにもいくまい。

というか、年齢を言っていないのにキーラから年上扱いされていることに、少しだけ年を取ったことを痛感した。

「……んじゃ、お言葉に甘えるね」

「ミュキ殿、キーラはブリュス領主マリオン・ユーティライネンの妹だ。その彼女がここに来ている。それも、鎧のままだ。何を意味すると思う？」

「……落城、ですか？」

深雪の言葉で、キーラは俯いた。ブリュスは堅城と聞いたが、それを一ヶ月で落城に持ち込むとは、ハイランドの兵力は相当のものだろう。

「……うん。ハイランドの兵力は二万だよ！ 僕達は三千しかないのにさ！ どうしようもないよっ！」

キーラの言葉からは、強い無念さが感じ取れた。攻撃三倍の法則というものがあるが、ハイランドはそれを遙かに上回る兵力を動員してきた。防ぎきれなくても無理はない。

「……今は姉上とアドルフがこっちに退却してきてる」

「それで、今後どうするか。ミュキ殿にそれを聞きたい」

「あたしにですか！？」

「ミュキ殿は違う世界から来ているのだろう？ 我々では思いつかん戦術を知っているやもしれん」

予想は的中した。フィリップは物分かりがいい。先程の会話で深雪の知識を見抜くと、それを聞き出そうとしている。既存の戦術に

囚われない、柔軟な思考の持ち主のようだ。

「……そうですね」

深雪は地図の前に立つと、カレワラの周囲を見た。周囲には森林が広がっており、道はどれも細い。

「ミカ君、カレワラには何人の兵士がいるの？」

「えっと……」

「五千そこらだ。それに加えて、ブリュスより退却しているのがおよそ八百」

「五千八百で、二万の敵と戦う。正面からじゃどうやっても無理です」

「それぐらい僕だってわかるよ。キーラ達も無理だったんだから」

「なら、正面から戦わなきゃいいの。幸い、カレワラの周りは森ばかりだしね」

周囲は森林。この状況を活かす戦術を、深雪は知っていた。

「この森を最大限に活用する、モッティ戦術っていうのが、私の世界にはあったのよ」

「……面白そうだな。一つ、教えてもらおうか」

フィリップは笑みを浮かべると、近場の机に紙を広げた。

#2・目覚めた先は（後書き）

ミカ・キンクネンだよ。

いやー、もうホントにびっくりしたよ！ ミュキはあんなこと言ってるけど、きっと女神様だって。

そりゃあ絵本の女神様に比べればちょっとパツとしないけど……って、これは内緒だよ？

って、キーラいたの！？ ミュキには内緒……もう、わかったよ、オゴればいいんだよ！

次回 「森林の悪夢」 お楽しみに！

ミュキはミュキで可愛いと思う……って、棒読みとか言うなー！

――

どうも、つあぎです。新作です。

見ての通り冬戦争モチーフ。ダラダラと続けたくはないですが、幾分筆が遅いので、また気長にお付き合ってください。

#3・森林の悪夢（前編）

ソプニカ諸侯連合 カレワラ

「……なるほど。確かに面白い戦術だな」

「でしょう？」

深雪から「モッティ戦術」について説明を受けたフィリップは、唇の端に笑みを浮かべた。

「でもさー、なんか卑怯って感じがするよー」

キーラはその横で不平そうな表情を浮かべている。

「背に腹は代えられまい。我らの任務は、敵の進軍を抑えることだ。ここで食い止めていれば、中央が何らかの形を出してくれるだろう」
武断派の外見とは裏腹に、フィリップは現実がよく見えているらしい。彼の言葉に、キーラも言葉を詰まらせた。

「キーラ、追撃はなかったか？」

「まあ、僕がコツチに来るまでは。……略奪もやってるだろうし、ね」

キーラの言葉には悔しさが混じっていた。中世風の時代となれば、陥落した都市は略奪に遭うのが常だ。ましてやキーラは領主の妹と聞いた。悔しさもひとしおなのだろう。

「ラナ殿はなんとしても救出せねばな。マリオン殿から目をつけられては困る」

「僕はどうでもいいみたいな言い方だねー」

「ははは、そんなことはないさ」

すねるキーラをフィリップがなだめる。この様子を見ると、カレワラとブリュスには交流があるようだ。ミカとキーラも仲良さそうにしていたし。

そういえば、先程からちよくちよく名前が出ているが、マリオンとは何者だろう。ブリュス領主と聞いたが、目をつけられては困るほどの人物なのだろうか。

「……あの、マリオンさんって？」

「ああ、僕の姉だよ。僕は三姉妹の末っ子で、一番上がマリオン、真ん中がラナ。でも、マリ姉はほとんど中央にいるから、実質ラナ姉が領主みたいなものだよ」

「ブリュスは重要拠点だし、マリオン殿も口が上手い。中央でかなりの力を持っているようだ。それに、あまりいい噂は聞かないしな」
「……うん、マリ姉は僕達には優しいけど、他の人には厳しいっていうか、根に持つタイプっていうか……」

キーラが苦笑した。身内からもそう思われているのなら、よほどだろう。確かに敵には回したくないタイプだ。

「うん、なんとなーくわかった」

「お話、終わった？」

「うわっ！？ ……ミカ君？」

横からミカがひよこつと顔を出してきたことに驚く深雪。そういえば説明をしだした頃からミカの姿は見えなかった。確かに彼はまだ子供だ。退屈な話だったのだろう。

「ああ。ミカ、敵が動き出し次第、こちらも動くぞ。構わんな？」

「うん。フィリップに任せるよ」

どうやらミカはフィリップの傀儡のようだ。確かにミカは若年だし、本人も了承しているようなので、部外者の身では何も言えることはないが。

「お話すんだんなら、ミュキはお昼まだでしょ？ 用意してるから、一緒にどう？」

「え？ ……もうそんな時間？」

そんなことを言っていると、鐘が鳴った。それと同時に空腹感を覚える。そういえば昨日の夕食から何も食べていない。

「お昼の鐘だよ」

窓の外をちらりと見てみれば、高い塔が見えた。頂上には鐘らしきものが見える。先程の言葉から察するに、どうやら時計台のようだ。

「昼か。……そうだな。ミュキ殿も空腹だろう。先に昼食を摂っていてくれ。俺はもう少し考えたいことがある」

「あ、じゃあ僕も一緒にいい？ 馬で走りっぱなしで、お腹空いちゃったよ」

「キーラはご飯よりも先にお風呂だよ。貸してあげるから、行つて来なよ」

「ホント！？ ありがと、すぐ行くね！！」

キーラが喜んで部屋を出て行った。彼女の顔や髪は煤けていたから、籠城の時はろくに風呂にも入れなかったのだろう。鎧を纏った武将といえど、やはり女の子なのだ。少しほほえましくなる。

「ではな。ミュキ殿、聞きたいことができれば、また相談に来させてもらうよ」

「あ、はい。いつでも構いませんよ」

「じゃ、ミュキ、案内するね」

ミカが深雪の手を取って、部屋の外を案内しだす。どうやらここは城と言うよりは館の類だ。この中を歩いているだけでは、戦の臭いはしない。石造りの廊下がミカの靴で小気味いい音を立てていた。壁の方を見ると、壁も煉瓦で作られているようだ。これがこの地方の標準なのか、それとも防火対策なのか、そこはよくわからない。

そういえば、ミカは何気なく手を繋いできたが、異性と手を繋ぐなど、十年以上ご無沙汰だ。それがこんな少年に。

いや、ミカは美少年だから、嬉しくないといえは嘘になるが。

「はい、ここが食堂。あ、そうそう。ミュキは行き倒れてた旅人つてことになってるから」

「行き倒れ……」

フィリップの提案だろうが、行き倒れてる自分を想像すると、な

んだかい気にはなれなかった。

「でも間違っていないよ？ ミュキは城下町の人気のないところに倒れてたんだもん。それを散歩してた僕が見つけたってワケ」

こちらの世界に送り込んだのはセシリアの仕業だろうが、また物騒なところに送り込んだものだ。何か間違いがあったらどう責任を取ってくれるのだろうか。

「つ・ま・り。僕はミュキの恩人ってワケ」

「……確かにそうよね。ありがと、ミカ君」

どんな形であれ、倒れていた自分を拾って、ふかふかのベッドに寝させてくれたミカは恩人である。ミカに向かって頭を下げると、彼は得意げに胸を張った。

ミカに連れられて食堂に入る。そこは普通の社員食堂、といった趣だ。実務担当の文官が主に使っているのか、ここにも戦の臭いはいない。

周囲の人に気さくに声をかけるミカの後について歩く。人望というか、慕われてはいるようだ。厨房のカウンターで昼食を受け取り、自分で配膳する。セルフサービスだ。昼食の内容は黒パンにロールキャベツと質素なもので、ミカも同じ内容だった。領主だからといって特別扱いはされていないようだ。

ミカの隣に座って、手を合わせる。

「いただきます」

「へー、ミュキのところはそうするんだ。先に食べていいよ。僕はお祈りするから」

ミカは両手を顔の前で組むと、目を閉じた。何かを呟いているようだ。小声なうえに周囲も賑やかなので、よく聞き取れない。

少し時間がかかりそうなので、先に食べるでしょう。ロールキャベツを切り分けて、口に運ぶ。

口に含んだ瞬間、違和感があった。味がないのだ。とりあえず咀嚼してみると、微かにロールキャベツの味がした。ミカのほうを見てみると、器に何かを振りかけている。テーブルを見てみると、小

瓶がたくさん置いてあった。どうやら味の調整は食べる側のようだとりあえず塩をかけて、適当に味付け。元々舌は貧しいので、今更これぐらいどうってことはないが。

それでも、正直な話、おいしくない。

「ね、ミュキ。後で僕の部屋に来てよ」

食事を終えたところで、ミカが袖を引っ張ってきた。

「ミカ君の部屋に？ 別にいいけど、何するつもり？」

「ふふ、何をされたいの？」

ミカはくすりと笑って、深雪の顔をのぞき込んでくる。その笑みにはどこか色気が感じられた。

「はい！？」

そして、突然の逆質問と凝視に戸惑う深雪。そんなつもりは全くないし、想定外の答えだった。そして、いくら子供といっても、美少年に見つめられるのはなんだか恥ずかしい。

「ふふ、冗談だよ、冗談」

再びミカが笑った。今度はイタズラっぽく。

過剰反応してしまった自分がなんだか情けない。こういう扱いには慣れていないのだ。

「だってミカ君、真顔で言うんだもん……」

「ごめんごめん。でも、僕だってあんなに驚かれるとは思わなかったよ」

「悪かったわね、美少年に免疫がなくて！」

こうなったからには開き直るしかあるまい。正確に言えば、美少年にではなく、女性扱いになのだが。

「あはは。で、用事なんだけど」

「ふむ」

「ミュキは別の世界から来たんでしょ？ 別の世界のこと、聞かせてくれない？」

ミカの瞳は輝いていた。無理もない。自分きつと同じ反応を示すだろう。

……って、十一歳そこらの少年と同じ反応って、二十歳の女性としてどうなのだろうか。自分に対して少しため息。

「……どうしたの？ ひょっとして、イヤ？」

「あー、そういう訳じゃないわよ。コッチの話」

「??」

きょとした表情で首を傾げるミカ。そんな彼の姿は、年下趣味のない深雪ですら可愛いと思わせる。とりあえず話を戻そう。

「あたしがうまく話せるのは、歴史の話ぐらいしかないからさー」

正確に言うと、歴史＋戦争なのだが。さすがにそれを言うのは女性として、いや、人間性を疑われかねない。

深雪の持っている他の知識といえば、テレビゲーム。それも、十年以上前のレトロゲームがメインだ。両親ともゲーム好きだったので、子供の頃からテレビゲームに慣れ親しんできた。その都合で、最新機種よりも古い機種のほうが好きだったりする。あとは映画やバイクなんかの知識も持っているが、それらは付け焼き刃だ。

これらの知識のなかで、ミカにうまく説明できるのは、歴史ぐらいしかない。

「あ、それ聞きたい！」

「え、ホント？」

「うん！ ミユキの国の話、すっごく気になる！」

ミカはずいぶんと前のめりだ。無邪気な子供というのは、洋の東西を問わず、可愛いものだ。

そういえば、いくつか気になることがあったんだ。いい機会だし、聞いてみることにしよう。

「じゃ、後で話してあげるね」

「わ、ありがと！！」

「そうそう、教えてほしいことがいくつかあったんだけど……」

「ん？」

「ミカ君って、いくつ？」

これは会った時から気になっていた。二桁にはなっていると思う

が、子供に接する機会はあまりないので、細かいところはよくわからない。

「んー。いくつに見える？」

ミカはくすくすと笑って、問いかけてくる。質問を質問で返すなと習わなかったのだろうか。

「……十二ぐらい？」

「惜しいっ!! もうすぐ十一だよ」

予想はある程度当たっていた。なぜか一安心。

「ミュキはいくつ？」

「あたしは二十歳……二十歳」
はたち にじゅうさい

はたちという言い方が通じるかどうか知らなかったので、少し言い直す。

「へー、そうなんだ。てっきりキーラと同じぐらいって思ってた」

「え。キーラさんっていくつ？」

「確か十六ぐらいだったと思うよ」

四つ若く見られるなんて、まだまだ自分も捨てたものじゃないらしい。

単純に、東洋人は若く見られるというだけなのだろうが。

「ふむふむー。で、話はミカ君に戻るけど、ミカ君は領主様だよね？」

「まあね。でも、領主になったのは半年ぐらい前。お父さんが急に死んじゃって、子供は僕しかいなかったから、跡取りになっちゃったんだ」

「あ。……ちょっと嫌な話だった？」

「ううん。まあ、領主っていっても、フィリップが色々やってくれてるから。フィリップは元々傭兵で、若い頃にお父さんが取り立てたんだ。それからずっと、カレワラのために働いてくれるんだよ」

傭兵出身ということで、フィリップの柔軟さには納得がいった。

傭兵は生き残ることが第一だ。既存の戦術に囚われて、硬直したままでは、生き残る確率は減ってしまうだろうから。

「僕は大人になるまで、フィリップから助けてもらわなきゃなんないんだ。僕は何もわかんないんだから、間違ったことをしたら、みんなに迷惑かけちゃうから……」

ミカの表情が変わった。先程までとは違う、真剣な眼差しに。

「フィリップだけじゃなくて、ここで働いてるみんな。ううん、それだけじゃなくて、カレワラに住むみんなを楽にしてあげたいから……。僕は頑張らなきゃ」

そこまで口にして、ミカの表情は元に戻った。柔らかな、可愛らしい笑顔。

「……あはは、ちよつとマジメな話をしちゃったね」

「ううん、大丈夫。でも、ミカ君の言葉聞いていると、あたしもがぜんやる気が出てきたよ」

「ふえ？」

「他の国の歴史にだって、学ぶところはたくさんあるはずだから。

ミカ君が一人前になる手助けをしたいと思って、ね」

ミカの言葉を聞いていると、この小さな領主の役に立ちたいという気分がわいてきた。フィリップをはじめとするカレワラの人の気持が少しわかった気がする。

「……うんっ！　ありがとっ！！」

ミカははじけるような笑顔を浮かべ、深雪の手を握ってきた。

だから、その笑顔は反則だよ。

そんなことを考えつつ、深雪は照れ笑いを浮かべるのだった。

くブリュスくカレワラ間・ラガド街道

森林の中にある細い道に、ハイランド帝国軍の一隊がいた。兵力

は二千そこらで、その約半数が騎乗している。

「……細か道に森・森・森……。嫌んなるねえ……」

隊の中央にいる、騎乗した女性がハイランド西方の訛りで呟いた。髪は長く、色は赤。それをポニーテールにまとめている。二十代半ばに見え、どこか勝気な雰囲気のある女性だ。黒い鎧には傷が多く、彼女は女性でありながら前線で戦っていたことを予想させてくれた。ブリュスからカレワラへと続くラガド街道。森林の中を縫うように走っており、見通しはよくない。伏兵を仕掛けるには最適の場所である。

だが、ここを通らないことには、カレワラに向かえない。

ブリュスへと攻め込んだハイランド帝国第三軍司令官であるミハエル・コリアノフはそれを苦慮していた。彼に与えられた任務は、ブリュスからカレワラを攻め落とし、最終的にはソプニカ諸侯連合の首都ソフィアで友軍と握手、といったものである。ソフィアはソプニカ地方の中央部に位置し、コリアノフは南から、友軍は西から攻め込んでいた。

まだ序盤戦であるため、ゲリラ的な奇襲による無駄な損害は避けたい。そのため、子飼いの一人であるカチューシャ―騎乗した女性―に一隊を率いらせ、街道周囲の偵察に向かわせていたのだった。

「それにしてもカチューシャ様、略奪が一日とは、いかんせん……」

「それでよかとよ。ブリュスはあたしらの拠点になるっちゃけん、あんましやりすぎて恨まれちゃいけんやろ？」

陥落した都市への略奪は、通例なら三日間行われる。だが、コリアノフは一日に留めさせた。物資は足りているし、足下を固める意味でも、略奪を控えさせたのだった。

「にしても、暗か道やねえ。もうちつと広かどこに出な、気が休まらんばい」

道は細く、周囲は森。本当に嫌な地形である。すると、先行させていた斥候が戻ってきた。

「カチューシャ様、報告です」

「何ね？」

「野営跡を発見しました。規模からして、敵兵の数は千にも満たぬかと」

ブリュス残党の、ラナが指揮する隊のものである。

コリアノフから、戦闘は極力避けるようにと言われていた。兵力差は十分にあるし、この狭い道で戦うのは危険だからだ。

カチューシャもそれは理解していた。だが、解放奴隷だった自分をここまで取り立ててくれたコリアノフへの恩返しは、敵を倒し、手柄を得ることだと思っている。だからこそ常に最前線で戦っていた。

そして、目の前にいる敵を逃すことは、武人の恥。

「……何日前んかわかる？」

「二日ほど前のものと思われます。そう遠くには行っていないかと」

ブリュスからカレワラまでは六日の距離。陥落から、偵察に出た今日で三日目。三日分離されているが、こちらは騎乗している。追いつけなくはない。

「……よし。連中ば逃がしちゃいけん！ 追撃するけんね！」

カチューシャは号令をかけると、森の中を駆けだした。

#3・森林の悪夢（前編）（後書き）

ちよつと長引きそうなので分割してお送りします。
続きは六月中には……w

せつかなのでキャラスペック。

・白雪深雪	統率…52	武勇…80	知略…91	政治…49
・フィリップ・ライオネス	統率…93	武勇…97	知略…73	
政治…71				
・ミカ・キンクネン	統率…27	武勇…30	知略…31	政治…
44				
・キーラ・ユートイライネン	統率…79	武勇…86	知略…4	
0 政治…21				

#3・森林の悪夢（後編）

ラガド街道・ラナ隊

ラナは部隊に小休止を取らせていた。当初は八百人いた兵士も、落伍者や逃亡が重なり、現在では七百人ほどにまで減っている。

落伍者はともかく、逃亡兵が出るのは、自分の力不足が招いたものだ。ラナは深くため息をつく。

「姫將軍、どうぞ」

すると、アドルフが水筒を差し出してきた。

「アドルフ？」

「お水も飲まれていないようでしたので……。拙者の水筒ですが、どうぞ」

現在は撤退中のため、食料も水も足りていない。少しの水しか飲んでいないのは確かだ。

だが、それはアドルフも同じはず。

「……あ、飲み口はちゃんと拭き取っておりますので！！」

ラナがじつと水筒を見つめていると、アドルフは何を勘違いしたのか、水筒の飲み口をハンカチで拭いている。確かに他人の水筒をそのまま飲むのは気が引けるが、今はそんなことを気にしている状況ではない。それに、アドルフとはよく知った間柄なので、普段でも気にしない。何せ、アドルフはラナの遊び相手であり、護衛役であり、教育係でもあった。かれこれ十五年ほどの付き合いになる。それなのに、慌てて水筒の飲み口を拭いているアドルフの姿は、どこかおかしくて、ついついくすりと笑ってしまった。

「……姫將軍？」

アドルフはラナが笑った理由がつかめてなさそうだった。きよと

んとしている彼の姿は、ますますおかしい。

……思えば、笑ったのはずいぶんと久しぶりのような気がする。

「ふふ、なんでもありません。大丈夫です。水ならまだ足りていますし。……アドルフの水筒が嫌という訳ではありませんよ?」

そこまで口にして、もう一度笑う。

「……でも、心遣いは感謝します。ありがとう、アドルフ」

「いえ……。……しかし、無理はなさらないでください。姫將軍をお守りするのが、拙者の任務ですから」

アドルフが頭を下げる。無骨で律儀な、頼りになる武刃者だ。実際、先の籠城戦でハイランド軍を苦しめたのは、彼の手腕あってこそだ。ラナもキーラも指揮官としての技量は中の上といったレベルであるため、歴戦のアドルフはブリュスにとってなくてはならない人材である。

ともあれ、先ほどのやりとりで少しは気分がよくなった。カレワラまではあと二日。追撃もなさそうだし、どうにかなりそうだ。

「ラナ様ッ!! 急報ですっ!!」

「どうしました?」

兵士が駆け込んできた。彼の慌てぶりは、嫌な予感を感じさせる。「カレワラの斥候からの報告ですが、ハイランド軍が追撃に動いた模様です!! 兵力は騎兵が千人ほどのこと!!」

「……まずいですな。我々は弱りきっています。この状況で追いつかれると……」

「……覚悟を決めねばなりませんか」

敵が騎兵となれば、追いつかれるのは時間の問題だろう。幸い、この隘路では敵騎兵も全力を出し切れまい。それならば、できるかぎり粘り、ユーティライネンの名を辱めぬようにするのみ。

「拙者がなんとか食い止めてみせます。姫將軍はどうかカレワラへ……」

「いえ、ここで大将たる私が逃げては、父カールの、そしてユーティライネンの名を汚すことになります。桔梗の紋章に賭けて……退

く訳には参りません！」

まだ姉も妹も生きている。ユーティライネンの血脈は保たれる。ならば、敵に背を向けて死ぬよりは、正面から戦って死ぬのが大将の生き方だろう。

ラナは剣を抜き、号令をかける。

「元氣な者は私に従い、敵を迎撃します！！ この隘路では千も五百も同じこと！！ 死中に活を求めましょう！！」

「……姫將軍。その決意、お見事です。拙者もお供致しましょうっ！」

怖くないと言えば嘘になる。

だが、アドルフも一緒となれば、ずいぶんと心強い。

ラナは騎乗し、兵士達の激励に走り回った。

くカレワラ

この世界に来て二日目。深雪はフィリップに呼び出されていた。

昨夜はフィリップとキーラがささやかな歓迎会を開いてくれたが、少々飲み過ぎてしまった。カレワラの酒は強い。ましてや普段飲み慣れぬ味であるため、余計に酔ってしまった。ジャガイモの酒らしいが、洋酒の類は苦手である。

今の服装はジャージではなく、この世界の衣服。ゆったりとしたクリーム色のワンピースだ。普段はジーンズやチノパンばかり穿いているので、スカートは久々だ。

「深雪です」

「ああ、入ってくれ」

フィリップの部屋をノックし、中に入る。そこには昨日の服装と

は異なり、鎧を纏ったフィリップがいた。鎧の色は赤く、肩には虎が描かれている。

「……どうしました？」

「ラガド街道に潜ませていた間者から報せが届いてな。敵の一隊が動き始めた。どうやらラナ殿の隊を追撃するらしい」

「敵、いたんですか!？」

「ブリュスが陥落してから、周囲の偵察をしていたようだ。それでラナ殿の部隊を発見したと」

「じゃあ、戦闘は……」

「明日にでもぶつかりそうだな。だから、我々はラナ殿の救援に向かう。ラナ殿はマリオン殿の妹というだけでなく、気骨のある有能な将だ。彼女を見殺しにする訳にはいかん」

フィリップは机上の地図に指を走らせる。

「敵兵力は二千ほど。こちらは千五百人を動員する。そのうち千人はキーラに率いさせ、街道上にいるラナ殿の救援に向かわせる。残り五百人は、俺が率いて、森の中から攻撃をかける」

フィリップは地図を指でなぞりながら説明をする。ラナとキーラで敵を押さえているうちに、フィリップは柔らかな脇腹を突く、という腹積もりのようだ。特に問題は浮かばない。

それにしても、ずいぶん早く情報が届いたものだ。

「ミュキ殿はどう思う？」

「いえ、問題はないと思います。それにしても、今情報が届いたんなら……」

「その点は問題ない。ブリュスが攻められて以降、ラガド街道にはこの地に精通した者を何人も潜ませている。リレー形式で情報を伝えるようにしているから、その日のうちに情報は届く仕組みだ」

「なるほど……。フィリップさんが考えたんですか、その仕組み？」

「実行に移したのは俺だが、考えたのはミカの父だよ。稀有な才能を持たれていたんだが……。まあ、この話は今度しよう。ミュキ殿を呼び出したのには、訳がある」

フィリップは咳払いをして、深雪の前に立つ。彼はやや小柄であり、その身長は深雪より少し高いぐらい。百六十五センチほどだろうか。だが、歴戦の風格か、その体には威圧感があった。

「頼みがある。女神様が来た、という噂が兵の間に広まっていたな。……ミユキ殿なら、俺が何を頼もうとしているかわかるだろう?」

フィリップは申し訳なさそうな表情を浮かべ、自嘲気味に笑った。少々買い被られている気がするが、フィリップが頼もうとしていることは理解できた。

「……兵士達の偶像になるため、女神を演じてほしい……ですか?」
「正解だ。俺としては非常に心苦しい。何せ、この地の争い事に、全く関係のない貴女を巻き込むことになるのだからな」

フィリップの声には、どこか怒りが混じっているように聞こえた。それはこの状況を招いた政治に対するものなのか、それとも不甲斐ない自分に対してのものなのか。

「だが、背に腹は代えられん。ブリュス陥落で、兵の士気は落ち込んでいる。起爆材が欲しい」

「……それだけ、ですか?」

「ああ。流石に命まで懸けてもらおうとは思っていない。第一、貴女は知識こそあれ、実戦経験はないのだろうか? そんな貴女にそこまで強いるのは、俺のプライドが許さん」

フィリップのプライド。それは理解できる気がした。この地を守る任務を帯びた者が、全く関係のない者に頼ることは良しとしない。借りるのは知識だけで結構。

彼は根っからの武人なのだろう。ホツとした反面、信頼されていないように少々寂しい気がした。

とはいえ、頼られていることに変わりはない。何事もできる範囲で最善を尽くせ。自衛官の父が教えてくれた、深雪の信条である。

「……それぐらい、お安い御用です。ただ、一つだけお願いが……」
「ああ。可能なことなら、何でも聞こう」

「あの、女神様って崇められて動きにくくなるのは嫌ですから、誰

かわかんないように、できるだけ厚く化粧してもらえませんか？」

ちやほやされて、結果的に自由を奪われるのは嫌だ。女神は女神、白雪深雪は白雪深雪で振る舞いたい。

そんな深雪の依頼は、フィリップからすれば意外だったようだ。

「その程度か？ 構わん、妻の侍女にやらせよう」

フィリップは少し笑って、頭を下げた。

「……すまん」

「そんな、えっと、顔上げてください」

年上の者から頭を下げられるのは、正直居心地が悪い。それに、自分は何とも思っていないから余計にだ。

「急ぐんでしょ？ 場所だけ教えてくれれば、すぐに行きますんで！ あと、服はあのジャージでいいんですか？」

フィリップとしても時間が惜しいに違いない。彼を急かし、この居心地悪い時間を早く終わらせることにしよう。

深雪が急かしたことで、フィリップは顔を上げた。心の中でホッと一息。

「……いや、貴女は部屋にいてくれ。侍女をそちらにやらせるから。服もあの服でいいだろう。馴染みの薄い服のほうが信用されやすいだろうからな。ともかく、準備ができたら、この部屋に来てくれ」

「わかりましたっ。じゃ、また後で！」

深雪はフィリップに向かって敬礼をすると、急いで部屋から出ていった。

「……あの、これでよろしいでしょうか？」

化粧が終わった。鏡に映った自分の顔は、全然違って見える。普段は薄い化粧しかないから余計にだ。

「うん、まるで別人。どうも、ありがとうございます」

侍女に向かって頭を下げると、侍女は面食らった顔をした。

「いえ、めっそうもございません。……それでは、失礼します」

侍女はそそくさと出て行ってしまった。礼を言ったのが悪かったのか、それともよほど面白い顔になってしまったのか。

とりあえずジャージに着替える。くたびれたジャージと、華やかすぎてケバケバしい化粧とのギャップはなんだかシュールで、思わず笑いがこぼれてしまった。

部屋を出ると、そこにはキーラが待っていた。

「女神様、お待ちしてました……」

「やあ、キー坊」

「……ぶはっ！！ あは、あははははっ！！ 何それ、化粧濃すぎて、ほとんど別人……！！」

深雪のすっぴんを知っているせいか、キーラの笑い方は凄い。衣装とのギャップが、また笑いを誘うのだろう。

「……ふひー。本番大丈夫かな、笑っちゃわないかな……」

「どんだけ笑うの。後で叩くからね」

「生きて帰ってこれたら、ね。はー、もう、面白いもの見れたなあ……」

キーラはまだ笑っている。笑いながら「生きて帰ってこれたら」なんて言うあたり、彼女はまだ若いにも関わらず、戦慣れしているのだろう。

「帰ってこれたらなんか言わない。絶対叩かれるの、キー坊は」

「それもそうだね。お手柔らかに」

キーラはある程度落ち着いてきたようだ。笑いが徐々に収まっている。

「つていうか、キー坊って？」

「さっき思いついた、キーラちゃんのだ名」

男性向けのあだ名だが、キーラはボーイッシュなところがあるので、それはそれで良いと思う。

「なるほどー、なかなか斬新だ。……そうだ。この戦が終わったらさ、ラナ姉^{ねえ}を紹介するよ。お姉ちゃんはすごい美人だからさ、きつとびっくりするよ！」

「へー、それは楽しみ。……そうそう、この戦争が終わったら……
なんてのは、死ぬ人のセリフだからね。今後の使用には細心の注意
を払うように！」

「え、それ初耳だよ！！」

「特に『俺、この戦争が終わったら、結婚するんだ……』とか『故
郷に帰って女房と小さな店を……』ってセリフはまずいわ。言った
人はまず死ぬ」

「ふえー、気をつけなきゃ。……ま、相手を捜さなきゃ言いようが
ないけどね」

「そりゃあたしもだ」

なんてことを話しつつ、フィリップの部屋をノックする。

「ああ、入れ」

「失礼しまーす」

部屋の中にはフィリップとミカがいた。ミカの服装は普段着のよ
うで、彼は前線に出ないらしい。

「……あははっ！！ ミュキ、なにそのカッコ！！」

案の定、ミカは爆笑する。それにつられてキーラも再び笑いだし
た。

「……ごほん。ミュキ殿、まあ……お似合いだな」

フィリップも懸命に笑いをこらえているようだ。

「……これ、大丈夫ですか？ 兵隊さん、笑っちゃわないですか？」

「あはは……。僕達はミュキのことを知ってるから面白がってるん
だよ。知らない人なら大丈夫だよ、きっと」

「ミカの言うとおりでな。……ひとまず、伝承のものと同じマント
だ。これだけでも少しは雰囲気が違うだろう」

フィリップが黒いマントを差し出してきた。それを羽織ると、な
んだか気が引き締まった気がする。さっきまで笑っていたミカとキ
ーラも、少し引き締まったようだ。

「うむ。少しは見違えたな。では、行こうか」

「……はいっ」

「少し和んだよ。……助かった」

フィリップは少し笑って、深雪の背中を叩いた。どんな歴戦の勇士でも、戦の前は緊張するのだろう。それを解き解せたのなら、この厚化粧にも効果はあった。

ともあれ、これが初仕事。深雪は気を引き締めるために頬を叩くと、フィリップの後について歩くのだった。

カレワラ城内、中央広場。

城といっても、城壁で町を囲んだだけのものであり、先ほどまでいたところは館であった。城塞の類は存在しない。

「フィリップさん、城はないんですか？」

「十年ほど前に内乱があつてな。その時に滅茶苦茶に壊された。再建すべきだったが、あいにく予算がなくてな……」

フィリップは苦笑する。確かにカレワラはそう豊かな都市に見えない。予算不足が深刻なのだろう。それなら昨日の質素な食事にも納得がいく。

中央広場には、すでに兵士が集まっていた。千五百人という人数を実際に見てみると、非常に多く見える。広場の高台に立ち、フィリップが喋りだした。

「諸君、知つてのとおり、ハイランドの卑劣なる奇襲により、ブリュスは落ちた。歴史と伝統のあるブリュスは、ハイランドの蛮兵によって、非情なる略奪を受けていることだろう。我々は、カレワラをブリュスのようにしてはならないッ！！この戦争の大義は我々にあり、そして、神々の加護も我々にあるっ！！その証に、見よ、女神が我らの前にいるではないか！！」

フィリップがこちらを指差し、言葉を促す。兵士の視線と歓声を浴びたことで、上手く喋れるか不安になってきた。そう、緊張してきた。

「……私は一言しか語りません。カレワラは、あなた方が己の義務

を果たすことを期待しますッ！！！」

長い言葉よりも、短い言葉。そちらのほうが感情を込められると思う。

そしてこれは、かのホレーショ・ネルソン提督の名言だ。

少しして、兵士の歓声が巻き起こった。伝わったようで一安心。

兵士の歓声が冷めぬ中、フィリップが言葉を続けた。

「エピソードもまだ勝利を得ていない。そう、我々は最初に勝利を得る軍団になるッ！！ 諸君等はソプニカ最高の軍団であり、国民は我々の勝利を期待しているッ！！ 恐れることはない！！ ただ前に進めばいいだけのことだ！！」

フィリップが剣を掲げると、兵士の歓声は最高潮に達した。

深雪は化粧を落とし、ジャージからワンピースに着替えると、出陣していくフィリップ達をミカと共に見送っていた。城壁から見えるのは、わずかの平地と、鬱蒼とした森。その中に、フィリップの一団が入っていくのが見えた。

なんだか、ジャージが正装になったようで、変な気分である。

「うん、やっぱりミユキはそちのほうが可愛いよ」

「まあ、あれだけ厚化粧すればね」

「でもさっきのミユキ、かっこよかったけどね。今のでさっきのやつて欲しいなあ」

「もうやだよ、恥ずかしいから」

だが、これからも喋らざるを得ない状況にはなるかもしれない。毎回毎回、喋るネタは続かないというのに。

「……フィリップさん、大丈夫かな」

「大丈夫だよ。フィリップの強さ、知らないでしょ？ フィリップ

はね、体は小さいけど、すごく強いんだよ！」

確かにフィリップは小柄ながらも引き締まった体格だった。おそらく、瞬発力に長けているのだろう。小中高と剣道をやっていた深

雪だったが、中学の時の顧問がそんなタイプだった。小柄ながらもすばしっこく、近隣の顧問のなかでは一番強かった。

「キーラも女の子だけど強いんだよ。心配いらないって!」

ミカは心から二人を信頼しているようだ。自分よりも二人のことをよく知っているミカがそう言うのだから、深雪も二人を信じ、心配を心の中に封じ込めることにした。

深雪は背筋を伸ばすと、武運を祈る意味で、森に向かって敬礼をした。

くラガド街道

ラナの隊は、少しずつ削られてきていた。

無理もない。いくら隘路で騎兵の持つ衝撃力が削がれているといっても、兵の気力に差がありすぎる。

「……姫將軍、このままでは長くありません。拙者が食い止めますので、どうか脱出を……」

「アドルフ、いつから大將が兵卒よりも先に逃げていいことになりましたか?」

ラナを説得したのは、これで何度目だろう。彼女は一向に考えを改めようとしらない。

名將であったカール・ユートイライネンの才能と気骨を、彼の三人の娘のなかで一番強く受け継いでいるのは、間違いないラナである。そして、アドルフは彼女の気骨に惚れ込んでいるのも確かだ。

だからこそ、ここでラナを失う訳にはいかない。才色兼備の彼女は、これからのソプニカに必要な人間だからだ。

アドルフはカールの愛弟子であり、それがゆえにラナを死なせる

ようなことがあれば、カールに申し訳が立たない。いざとなれば、ラナを殴ってでも、自分が身代わりにならねば。

「ラナ様っ!!」

「どうしました!？」

「……朗報です!! 後方より、キーラ様がカレワラの援軍を引き連れてこられました!!」

「本当ですか!？」

「はい! まもなくキーラ様がこちらに参られます!!」

伝令の言葉が終わってすぐ、騎乗したキーラが駆け込んできた。

「ラナ姉ッ!! 大丈夫ッ!？」

「キーラ!!」

「つもの話もあるけど、それは後!! ラナ姉とアドルフは、ブリュスの兵を連れて後ろに退がって!! 僕達と交代しよう!」

後方からは、カレワラの兵士がブリュスの兵士を励ましつつ、前進してきている。間違いなく退き時だ。

「わかりました。姫將軍、ここは……」

「いえ、キーラだけに任せる訳には参りません。私はここに残ります!」

「もう、相変わらずラナ姉は頑固なんだから!! ……アドルフ、大変だったでしょ?」

キーラが苦笑する。確かにラナの責任感是非常に強く、頑固といえは頑固である。

「ま、ラナ姉はこうなったら聞かないからね。しょうがない。アドルフ、僕に任せて。あなたは退いて、とりあえず休んでちょうだい」

キーラに任せておけば、ラナのことは大丈夫だろう。ブリュスの兵も疲れきっている。これ以上、戦場に長居することは危険である。

「……かしこまりました。姫將軍、キーラ様、御武運を」

アドルフは握り拳を胸に当てるソプニカ式の敬礼をすると、ブリュス兵を率いて後退していった。

どうにか九死に一生を得たが、抑えるだけではどうしようもできない。ならば、敵の横腹に一撃を加えるつもりか。

願うことならば、カレワラ軍の勝利を見たかったところだ。そして、ラナの勝利も。

急にブリュス軍の勢いが増した。どうやらカレワラからの援軍が到着したようだ。

「敵の増援ucciか！？　こんままじゃまずかね……」

このまま留まったところで、戦果は望めそうにない。深追いしすぎ、歩兵とも分離してしまっている。ここはすっぱりと諦め、撤退するしかあるまい。

「しょうがなかね。全軍、そろそろ……」

カチューシャが撤退の号令をかけようとしたときだった。

森の中から、無数の矢が飛んでくる。まさか――。

「か、カチューシャ様、敵の奇襲ですっ！！」

「そんなぐらいわかつちよる！！」

突然の側面からの攻撃に、部隊はパニックに陥る。矢が止むと、敵歩兵が突っ込んできた。

このままでは、戦列を分断され、そのまま各個撃破されかねない。非常にまずい状況だ。

壊滅的な被害を被る前に撤退しなければ。だが、この混乱した状況で「撤退」なんてネガティブな言葉を使えば、士気は一気に下がり、下手したら部隊が瓦解する。指揮官の言葉には、それだけの力がある。カチューシャがコリアノフから教わったことだ。

「しょうがなか、全軍、元ん位置に……」

「撤退ッ！！　撤退だッ！！」

「ばかちん！！　撤退じゃなか、元ん位置に戻るとよ！！」

撤退も、元の位置に戻るも、本質的には同じ言葉だ。だが、詭弁

に過ぎないとはいえ、兵士達への影響は全然異なる。

「繰り返す、元ん位置に戻るばい！！」

カチューシャは馬首を返すと、部隊のしんがりを勤めながら退却していった。損害は三百強。本来ならば失わずに済んだことであり、自分の功名心が生んだ損害である。

カチューシャは情けなさとし訳なさに襲われながら、ひたすらラガド街道を駆けていくのだった。

#3・森林の悪夢（後編）（後書き）

ラナ・ユートイライネンです。

どうなることかと思いましたが、なんとかかなりましたね。

やはり、持つべきものは頼れる妹と、頼れる友人です。

それにしてもアドルフの水筒……惜しいこと、しちゃったかも……。

な、なんでもありませんっ！

それよりも次回……え、まだタイトル未定！？

……どうしましょう。と、とりあえず、次回をお楽しみにっ！！

（きよろきよろ）……ほっ、誰もいなかった……。

――
なかなかいいペースで書けていますね。

サブタイトルと内容がいまいち噛みあっていないような気がします

……。

次回予告は難しいですね！

#4・懸念と懸念

くカレワラ

「……と、いう訳で。中大兄皇子は蘇我氏をぶっ殺し、国内の改革を始めたの。この改革は、大化の改新、って呼ばれてるわね。……キリがいいから、ここで区切ろっか」

「はい。どうも、ありがとうございましたー」

「いえいえ」

フィリップ達が出陣して、二日が過ぎた。深雪は特にやることもないので、ミカに日本史を教えている。これはミカからの要望であり、深雪からしても暇潰しになっている。ミカからはすっかり教師扱いだ。

フィリップ達のこと気がならないという嘘になる。が、気にしたところでどうしようもない。今の自分にできるのは、ミカの話し相手ぐらいのものだ。日本という御伽衆おとぎしゅうのような存在になったと思う。

「失礼します」

ノックと共に、一人の女性が入ってきた。長くてくすんでいる、少しウェーブのかかった金髪に細い目。見たところ三十過ぎに見える。なかなかの長身で、穏やかそうな感じのする女性だ。

「や、サビーネ。具合はどう？」

「おかげさまで。本日より、仕事に戻らせていただきます」

「うん。無理はしないでね」

「隣の方は？」

「シラユキミユキ。遠い国から来た人で、物知りなんだ。ミユキ、この人はサビーネ・クランセン。カレワラの内政を見てくれてる人

だよ。ここ何日か、病気で休んでたんだ」

「あ、どうも。白雪深雪です。よろしく願います」

深雪は立ち上がり、サビーネに向かって礼をする。立ち上がって見てみると、サビーネの身長は百七十センチ以上ありそうだ。

「こちらこそ、よろしく願います」

サビーネの声は綺麗だった。高くて透き通った美声である。

「それでは、今日は挨拶だけ」

「あれ、もう行っちゃうの？」

「休んでいた間、仕事がたくさんたまっていますので」

サビーネは微笑んでからミカに一礼すると、部屋から出ていった。

「……もう、サビーネはホントに仕事好きなんだから」

「でも真面目そうな人じゃない」

「うん。実際、カレワラはフィリップとサビーネの二人三脚で持ってるようなものだからね」

ミカが苦笑した。この様子から察するに、ミカには全く権限がないのだろう。権限はないといっても、さっき会ったばかりのサビーネはともかく、フィリップはミカのために働いているように見える。そのことを知っているせいか、ミカは勉強熱心だ。深雪の日本史講座にしろ、持って来られる書類にしろ、わからないことはすぐに質問をしている。そして、飲み込みも早い。この様子だと成長は早そうだ。

領主という役職に就いている以上、早く皆の役に立ちたいと勉強する。幼いながらも、その責任感は立派なものだ。深雪はそこをかなり評価している。

「ミカ様、フィリップ様より伝令です」

「うん、入って」

今度入ってきたのは、伝令の兵士だった。息こそ上がっているものの、特に傷付いた様子はない。

「フィリップ様、ラガド街道にて、ハイランド軍の撃退に見事成功！
ラナ様もご無事です！」

「ホント!? ……よかった、作戦成功だね」

「現在、こちらへ撤収中です。もうじき到着かと」

「ありがと。それとご苦勞様。君はゆっくり休んでて」

「はいっ! 失礼します!」

兵士は一礼して、部屋から出ていった。兵士がいなくなると、ミカは深雪のほうを向き、にっこりと笑う。

「ミユキ、やったね!」

「うんうん。みんな無事で何より」

ほっと一安心。たとえ数日の付き合いとはいえ、フィリップやキラが戻ってこないというのは正直いたたまれない。

少しテンションが上がったので、ハイタッチでもすべく、片手を挙げる。

「ミカ君、ちょっとこの手を叩いてみて」

「? ……こう?」

「いえー」

ミカがおずおずと深雪の手を叩く。一人だけ声を出すのは恥ずかしいので、少し小声になる深雪だった。

「今のは『ハイタッチ』って言って、いいことがあったときにやるの」

「へえー。じゃ、もう一回しよっか」

「はいはい」

「「いえー!」」

深雪とミカはもう一度ハイタッチをする。今度は勢いよく。

「もうすぐ帰ってくるんだよね。帰ってきたら一人一人とハイタッチしよっか!」

「それ、絶対に手が痛くなるわよ?」

「大丈夫、ミユキとは違うから!」

「こいつ、生意気ぬかしおって」

得意げなミカにヘッドロックをかける。ミカの頭はちょうどいい大きさで、なんだかかけていてしっくりくる。

「いたたたた!! ごめんなさい、ごめんなさい!!」

「うむ、わかればよろしい」

ミカを解放してやると、彼は頭をさすりながらも、笑みを浮かべていた。

「……もう、こんなことを僕にするの、ミュキだけだよ?」

「そりゃあ、あたしはカレワラの人じゃないしね。もう遠慮しないわよ」

「そうだね。ミュキだから、許してあげる」

ミカはどこか嬉しそうだ。領主という立場上、こんな経験がないのかもしれない。両親もいないとのことだし、後でフィリップに聞いてみよう。

「戻ってきたら出迎えに行っておあげよう。あと、お酒と食べ物の準備もしてあげないと」

ミカはずいぶんとそわそわした様子だ。心底嬉しそうである。

「ミカ君、すぐく張り切ってるじゃない」

「だって嬉しいんだもん!! ……ちょっとサビーネと話してくるね!」

ミカはそう言うのと、いそいそと部屋から出て行った。彼の様子は喜怒哀楽がはつきりしていて、本当に微笑ましい。なんだか弟ができた気分だ。

『はいはい、お邪魔するわよー』

セシリアの声。ふと後ろを見ると、セシリアが椅子に座っていた。

「セシリアさんじゃない。どうしたの?」

「いやいや、幸先のいいスタートを切ったと思ってね」

「まあ、確かに。わざわざお祝いに来てくれたの?」

「そゆところ。ヒマだしね」

セシリアがくすくすと笑った。神様だっというのに、ずいぶんと脳天気なものだ。それとただ単にやる気がないだけか。

「ヒマだっというんなら、敵軍を一つ魔法でドカーンってやっちゃ

ってよ」

「そいつは無理な話ね」

「なんで？ 神様だから片方に肩入れできないとか？」

「んな訳ないでしょ。神様は基本自由なのよ。それに、神様が双方に肩入れしまくった戦争知ってるでしょ？」

「ああ、トロイ戦争。……戦争っていうかお話だけど。じゃあ、セシリアさんは何かこう、深い理由でも背負ってるの？」

「そりゃもう、深い深い理由ね。だって私、病気だもの」

「病気って、神様でも病気にかかるの？」

「重病よ。病名は労働恐怖症」

「仕事しろッ！！」

得意げなセシリアの顔が無性に腹が立つ。近くにあった不要書類を丸めて、彼女の頭をはたく。

「痛っ！ 冒瀆よ、冒瀆！！」

「せからしか、神様なら神様らしいことしなさいよっ！！」

セシリアは全く頼りにならない。そのことを痛感した深雪だった。

「……まあ、懸念事項がないわけじゃないけどね」

「懸念事項？」

「これでハイランドさんはより慎重になるんじゃないかなーってね」
セシリアが言ったことは、深雪も思っていたことだった。先の小規模な奇襲がうまくいきすぎたせいで、ハイランド軍に警戒心を持たせてしまったのではないか。これからハイランド軍を森林で拘束させて時間を稼ぐというのが深雪の抱いていた案であった。そして、拘束の根幹を成しているのが、奇襲による戦列の分断、そして包囲だった。

「ハイランド軍もバカじゃないわよね。同じ手段が何度も通じるかしら……」

「まあ、そこはあなた達の頑張り次第よ。それじゃ、そろそろお暇するわねー♪」

セシリアが姿を消した。適当に喋って帰っただけ。本当にただの

暇潰しだったようだ。神様だからといって自由すぎやしないか。正直羨ましい。

なんだかいっぺんに疲れた。セシリアが座っていた椅子に座り、目を閉じて一息つく。

ハイランド軍が多大な兵力を有している以上、ブリュスの奪還は難しいだろう。ならば、現状を維持しつつ、なんとか有利な条件で講和を結ぶしかあるまい。

一撃講和。

その単語が脳裏に浮かぶが、太平洋戦争での日本軍を思い出ししまい、ズルズルと消耗戦に引きずり込まれていくような、嫌な予感しかない。

フィリップは現状がよく見えているようだが、ブリュス出身だというラナやキーラはどうなんだろうか。中央で力を持っているという、ブリュス領主だったマリオンは。状況を省みず、感情だけで命令を出したりはしないだろうか。

問題は山積みに見える。だが、先のことばかり考えていてもしょうがない。今はフィリップに助言をするだけだ。

「よしっ！ あたしもがんばるぞっと！！」

「がんばれー」

「うひゃあっ！？」

ガッツポーズをとりながら目を開けた矢先、目の前には女性がいる。透き通るような白い肌に、血のように紅い瞳と唇が印象的で、髪の毛も真っ白だ。いわゆるアルビノなのだろうか。ともあれ、二十歳そこらに見える、透き通るような美女だ。

「?」

女性は深雪のガッツポーズを真似しつつ、首を傾げる。その仕草はどこか子供っぽい。

「……あ、あの、どちらさまでしょうか？」

「ララ」

「ララさん。フィリップの嫁さんだよ」

女性が自分を指差しながら名乗るのと、ミカの声は同じタイミングだった。ララと名乗った女性の後ろから、ミカがひょこっと顔を出す。

「あ、フィリップさんの奥さんですか。どうも、白雪深雪です」

「みゆき。……しってる。フィリップ、はなしてた」

ララの言葉はどこかたどたどしい。彼女の仕草や喋り方は、どこか子供のような印象を与えてくれる。

「フィリップ達もうすぐ帰還するそうだから、出迎えに行こう。そのためにもララも呼んだんだ」

「ああ、そういうこと。じゃ、あたしもついて行こうかなー」

「じゃ、案内するね。僕についてきて」

ミカの足取りは軽い。そんな彼についていくと、後ろから突然髪の毛を引っ張られた。深雪の髪は肩よりも少し長く、今は後頭部の真ん中ぐらいい縛っている。ちなみに、ポニーテールにすることもあれば、お下げにすることもあるし、三つ編みにすることもあった。後ろ髪は気分を変えていた。

「痛あっ!？」

思わず振り返ると、ララがきよとした表情を浮かべていた。

「ぴよこぴよこしてたから」

「もう、ララ、ミュキはお客さんなんだから、変なことしちゃダメだよ」

「……ごめんなさい」

ミカに怒られて、しよげかえるララ。子供に怒られる大人とは、なんだか変な光景だ。

「あ、あはは、大丈夫ですよ、大丈夫」

なんだか変わった女性だ。それに、フィリップの妻にしては若すぎるような気がする。

まあ、そのあたりは色々な事情があるのだろう。気にはなるが、さすがに色恋沙汰にまで立ち入る気はしない。

「それじゃ、改めて」

再び歩き出すと、ララが今度は深雪の手を握っていた。彼女の見た目は自分と同じぐらいだが、仕草は完全に子供だ。ミカの方がまだ大人に見える。

「あはは、ララはホントにお客さんが好きだね」

「うん」

ララが頷く。フィリップの妻だというが、彼との夫婦生活がなかなか思い浮かばない深雪であった。

ともあれ、妹―名前は響―^{ひびき}がいる深雪としては、妹が小さい頃を思い出してしまう。今は生意気なものだが、昔はこうして自分の後をついてきていた。

そんなノスタルジーに浸りつつ、深雪達は城門に歩いていくのだった。

くハイランド第三軍拠点・カレワラ

カレワラの領主室。そこには初老の男とカチューシャがいた。カチューシャは立ったまま頭を下げており、微動だにしない。

「……随分とやられた様だな」

男が口を開いた。白髪混じりの髪に似合った、しわがれた声である。髪も髭も白髪混じり、顔には深い皺が刻まれており、体格は痩せ気味だ。外見は年齢を感じさせるが、その瞳は威圧感がある。

彼こそがハイランド帝国第三軍指揮官、ミハエル・コリアノフである。

「……申し訳なかとです」

「敵を甘く見ていた。それが今回の敗因だろう。違うか？」

カチューシャにとっては凶星である。敵は落ち目、こちらは勝ち

戦の勢いを駆っている。防御側に有利な地形なのに、明らかに楽観していた。

命令違反に加え、自分の判断ミス。言い訳できる状態ではない。「……そんな通りです。コリアノフ様が戦闘ばしちゃいけんっち仰ったとに、あたしは手柄ば立てちゃろうっち思ってた……」

解放奴隷で一兵卒だった自分を取り立てたことで、コリアノフにはあらぬ噂が立っていた。妾にでもするつもりか。そんな下卑た噂。そんなことはない。神に誓える。

コリアノフは自分の才能を買ってくれている。だからこそ、この戦で名声を得て、噂をしていた奴等を見返したい。

その一心で働いているが、今回はそれが裏目に出てしまった。

自分が情けなくて、少し涙が出る。

「泣くな。勝敗は兵家の常。儂は別に怒っておらぬ」

コリアノフの返答は意外なものだった。カチューシャは頭を上げる。

「その心がけやよし。いいか、お前の長所はそこなんだ。今回はたまたま裏目に出たが、功名心のないお前は砂糖の入っていない茶のようなものだ」

コリアノフはその気難しそうな外見に似合わず、かなりの甘党である。これは個人的なものではなく、ハイランド帝国は甘党の人間が多い。

「お前は儂の剣。ロフスキーは儂の盾。剣は前に出ようとする気持ちが必要だ。それに、お前は才覚がある。脇腹を突かれたにも関わらず、あれだけの被害で済んだのだからな」

コリアノフが褒めてくれたところは「よかった探し」ではあるが、素直に嬉しいカチューシャだった。

ロフスキーはコリアノフのもう一人の副将である。カチューシャよりも少し年上で、温厚かつ慎重な人柄をした男だ。

「カチューシャ、次は大丈夫だな？」

コリアノフの声は念押しするようだった。どこか期待も込められ

ているように思える。

同じ失敗を二度はしない。自分の面子と、コリアノフからかけられている期待のために。

「……はい、同じ失敗ばせんようにします」

カチューシャの言葉を聞くと、コリアノフは微笑んだ。

「よし。敵は正面から当たる積もりがないということがわかっただけでも収穫だ。しばらく休め」

「……はいっ!!」

カチューシャは両手を組むハイランド式の敬礼をし、部屋から出る。

「……はふう、怒られなかった……」

ほっと一安心。だが、自分の判断ミスで死んだ兵のことを思えば、安心している場合ではない。

敵は奇襲を主戦術にしてくるつもりだろうか。だとすると、先の戦闘はその前哨戦か。カレワラの周りは深い森があり、平地は城の周囲程度だ。進軍には細心の注意が要りそうだ。

「しかしまあ、こん調子やったら時間かかりそうやねえ。本格的な冬になったら拙かばい……」

冬になれば積雪で進軍が鈍るのもあるが、補給が追いつかない。二万の兵力ともなれば、兵糧を支給できるのはハイランド兵のみで精一杯であり、半数以上を占めている傭兵達は自腹を切って従軍商人から買い付けることになる。基本的に冬は兵糧の価格が高く、傭兵にとっては痛い出費になり、実入りが減ることによって士気も下がってくる。士気が下がれば逃げる。傭兵とはそんなものだ。

冬は大規模な戦を控えるのがこの世界の常識であるが、政府はそれを破った。ソプニカは少し脅せばすぐに屈服する。そう甘く見ているようだ。

だが、屈服の気配はまるで見えない。このままでは面倒な戦になりそうである。

カチューシャは少しため息をつくのだった。

#4・懸念と懸念（後書き）

サビーネ・克蘭センです。

私が休んでいる間に、なんだか色んなことがあったみたいです。その場に居合わせなかったので、なかなかお話に混ざれないのが辛いです。

まあ、今やることは祝勝会の手配でしょうかね。

……カレワラ料理は美味しくないことで定評がありますから、残念なことになりそうですけど。

――
一ヶ月ぶり！ しかもあんまりお話進んでいません！

いや、梅雨明けしたから走り回ったり、古いゲームばっかしてたり……サーセン。

続きはお盆までには……。

そんな風に締め切り作らないと筆が進まないです。

#5・姫將軍の憂鬱

カレワラ・中央広場

カレワラ城内の中央広場には、フィリップ達を迎え入れるべく、たくさん住民が集まっていた。

敵の追撃を撃破、さらにブリュスの生き残りを保護。この戦争が始まって以来の明るいニュースなので、住民は皆、嬉しそうにしている。

深雪はミカとララと共に広場中央の銅像の下にいた。銅像の人物は大昔にカレワラを築城した英雄とのことだ。内乱の時もこの銅像だけは無事だったらしい。

「フィリップ様がお帰りになられたぞーッ！！」

一人の住民が大声をあげる。そのすぐ後に、住民の歓声とともに、フィリップ達が戻ってきた。フィリップは普段から小柄には見えないう貫禄を持っているが、今日は騎乗していることも含めて、よけいに大きく見える。傷の入った赤い鎧も歴戦の風格を感じさせ、非常に頼もしい。

「わ。ララさん、フィリップさん、カッコいいですね」

「うん。うん」

横のララはフィリップに見とれている様子だ。この様子だと、夫婦仲は良いようだ。まったくもって羨ましい。

「フィリップ、ご苦労様」

ミカの劳いの言葉と共に、フィリップは馬から下りる。続けて後ろにいたキーラ達も下馬する。

「フィリップ・ライオネス、ただいま帰還しました。戦果は敵兵三百ほどに、物資がいくらか。また、ブリュスの生き残り五百人と、

指揮官のラナ殿とアドルフ殿と合流しました」

「こちらの損害はわずかに百人程度です」

フィリップとキーラが続けて戦果の報告を行う。やや過大に報告しているようだが、戦果報告というのはえてしてそういうものだろう。

「そっか。重ねてご苦労様。……あと、キーラ。その『わずかに』

って言い方は避けてね。その人達にも、家族や友達がいるんだから」

「……はい。以後気をつけます」

ミカの指摘で、キーラは少し呆気にとられた表情になった。少し申し訳なさそうでもある。

「うん、わかってくれたらいいよ。キーラもご苦労様」

ミカが笑顔を浮かべた。今の指摘は本心から出たものだろうか。だとすると、いい上司になりそうな気がする。

「ミカ殿、救援のほう、感謝致します。ブリュス領主、マリオン・ユーティライネンの妹、ラナ・ユーティライネンです」

「ラナ殿の補佐を務めています、アドルフ・ルッキネンです」

フィリップの後ろにいた男女が前に出てきた。二人とも疲れているように見える。

「恩返しといっってはなんですが、姉からの指示があるまで、あなた方の指揮下に入らせていただきます」

「うん。そこはフィリップと相談して。細かいことはまた後で聞きましょう。城の中庭でささやかだけど宴の準備ができてるから。ゆっくり休んでね」

「はっ。心遣い、痛み入ります。……それでは全軍、ここで解散する！ これよりは部隊長の指示に従うこと！」

フィリップが号令をかけると、兵士達は部隊毎に散っていった。野次馬の住人も広場から離れていき、広場は少しずつ静けさを取り戻していく。

「フィリップーッ！！」

任務を終えたフィリップが一息つこうとしていたその時、ララが

フィリップにしがみつく。

「こ、こら、ララ！ 人前だ、よさんか！」

「だって、ララ、さびしかったもん」

人目もはばからず、フィリップに甘えるララ。その様子は見ていてなんだか微笑ましい。

「……仲が良さそうね。まったくもって羨ましいわね」

「ふふ、ミユキには僕があんな感じにサービスしようか？」

「……な、何言ってるんのよ。うーん、ミカ君がそんなことしてきたら、こう首を持って、ジャンプして一撃。仔牛の焼き印押しカーフ・ブランドディングでも決めようかしら？」

深雪が言っているのは初期型。いわゆるブルドッキング・ヘッドロックである。

一瞬だけだが、思わずどきりとしてしまった自分が相変わらず情けない。

「……それ、すっごく痛そうだね」

「なんてね、冗談よ」

照れ隠しも含めて、ミカの頭をぐりぐりと撫で回す。すると、キーラがやってきた。

「ミューキッ。相変わらず仲良しさんだね」

「お、キー坊。お帰りなさい。いえー」

キーラが手を挙げていたので、思わずハイタッチ。呆氣に取られているキーラを後目に、ミカもハイタッチ。

キーラの後ろには、先程ラナと名乗っていた女性がいた。キーラが自慢していたが、確かに美人である。どこことなく優雅な感じがして、武将には見えない。青と白という爽やかな色合いの鎧であるが、それでも似合っていない感じだ。

とりあえず、出撃前の約束通り、キーラの頭をはたく。

「むぎゅ。何するんだよー」

「前に約束したでしょ。帰ってきたら叩くって。ま、あたしなりの愛情表現？」

「そんな愛情表現はいいよー。そうそう、ミュキ、この人がラナ姉」
「どうも、ラナ・ユーティライネンです。ミュキ様、ですね。キーラから聞いております」

ラナがぺこりと頭を下げた。その仕草もいちいち優雅で、なんだか非常にかわいらしい。

「あ、白雪深雪です。様付けなんかなくていいですよ。あたしはただの居候ですんで」

「そうですか？ それでもミュキさんのことは、フィリップ様が評価されていましたよ？ 只者じゃないって」

「や、多分過大評価ですよー」

謙遜はしたが、現役武将であるフィリップから評価されるのは嬉しい。

「ラナ、お疲れ様。お風呂を準備させてるから、入ってきたら？」

「そうですか？ では、お言葉に甘えさせていただきますね」

「僕も入っていいかなー？」

「うん。一人も二人も同じだからね」

「やったっ！ じゃ、ラナ姉、お風呂行こうよ！」

「もう、キーラったら。……では、ここは失礼させていただきますね」

「うん。また祝勝会でね」

ラナはミカにお辞儀をすると、キーラに案内されつつ館へと歩いていった。カレワラはソプニカ地方では一番風呂が多いそうだ。なお、この辺りでの入浴は着衣したままでの蒸気浴、俗に言う蒸し風呂である。深雪も最初は面食らったものだ。

「じゃ、僕は祝勝会に顔出すけど、ミュキはどうする？」

「んー、何もしてないから、顔は出しにくいわねえ。裏方の手伝いでもさせてもらおうかな」

「ミュキがそれでいいんなら、何も言わないけどー」

「みんなが解散したぐらいにこっそり飲むわよ。まだこの辺りのお酒に慣れてないからね、先に潰れちゃカッコ悪いでしょ？」

なんだか不満そうなミカを諭しつつ、二人は館へ戻るのだった。

およそ四時間後。深雪は厨房で一息ついてた。

軽い気持ちで始めた裏方の手伝いだったが、洗い物が途切れることはなく、かなり疲れた。大学に入ってからしばらくの間、近所のラーメン店でアルバイトをしていた時の経験が活きたので良しとするが。

「あ、ミユキめーつけっ！」

そんな深雪に覆い被さってきたのはキーラだった。酒の匂いが強く、口調も楽しそうだ。だいぶ飲んだのだろう。

「もう、キー坊、酔ってるでしょ？」

「ふふん、酔おっぱらってなんかあ、いつまっせっんよおー」

明らかに酔っ払いの口調だ。後ろから抱きついてきているキーラを適当にあやしていると、普段着のラナが小走りでやってきた。鎧の上からではわからなかったが、ラナのプロポーションはたいしたものだ。戦での汚れを落とした彼女は非常に美しい。同性である深雪も少し目を奪われた。

「もう、キーラ、やめなさいっ」

「いやいや、いいですよー。酔っ払いの相手は慣れてますから」

深雪の友人には酒飲みが多い。そして皆、限度をわきまえない飲み方をする。深雪は酒に強い方ではないが、無茶な飲み方はしない。そのため、最終的には一人だけ理性を保った状態になっていたりする。酔っ払いの世話は慣れてしまった。

「らからあ、酔おってなんかあいよおー」

「ろれっ回ってないじゃない。ほら、水でも飲んで落ち着きなさいっ」

キーラは水の入ったコップを受け取ると、一気に飲み干した。

「ふー。お水がおいひい」

「はいはい、水がおいしいのは生きてる証。それは良かったわね」
キーラの頭を撫でていると、ラナが苦笑した。

「すみません、妹は酒癖があまりよろしくなくて……」

「あはは、見てたらわかりますよー。ラナさんは大丈夫ですか？
お水ありますけど」

「あ、大丈夫です。私は昔からお酒はダメでして……」

ラナがはにかむ。彼女はお嬢様という印象が強いが、下戸という
のも非常にはまっている。

そういえば、千歳はおしとやかな女の子だったが、物凄く酒が強
く、何杯飲んでもケロリとしていた。あれほどイメージに合わなか
ったことはない。

「ですから、宴会などのときはいつもキーラやアドルフに盛り上げ
てもらっているんです。……まあ、キーラはこうなっちゃいますけ
ど」

「こうとはなんらー！ こうとはー！」

「はいはい、酔っ払いは黙ってましようねー」

「むー。ところれえ、ミュキ、ラナ姉、ミカ君のこと、ろー思っ
てるうー？」

「ミカ君のこと？」

「私はあまり付き合いませんけど、見ていて微笑ましいですよ。
頑張ってるっていうのがすぐわかって」

「ああ、それはありますねー。ああいう弟が欲しかったなー。もう
無理な話だけど」

深雪の両親は仲良しだが、二人とももう四十代を折り返している。
無理な話ではないかもしれないが、さすがに考えたくはない。

「らよね、可愛いよねー！ 僕も弟扱いして可愛がりたいよおー。
ミュキが羨ましいよおー」

「……あれ？ キー坊、ひょっとして年下趣味？」

「悪いー？ ちっちゃいのはあ、男の子も女の子もみんな可愛いん
らよー！」

今のキーラの言葉で、枕草子の一節が頭によぎる深雪だった。まあ、ミカはもうすぐ十一歳、キーラは十六歳とのことで、年の差が一桁ならまだなんとかなりそうなものだが。

「ちっちゃい子はいいいよー！　かわいくてー、やらかくてー……」
キーラがだんだん大人しくなってきた。酔いがだいぶ回ってきたようだ。話していることもだんだん危険になってきたし、こころで眠ってもらおう。

「はいはい。キー坊、あなた酔ってるのよ」

「らからあ、よってなんか……」

キーラは威勢こそいいが、次第に船を漕ぎ始めてきた。

「むにゅう……」

それから彼女が眠るまで、時間はかからなかった。

「はいはい、おやすみなさい」

キーラを適当なところに座らせてやり、エプロンを脱いで、彼女の上にかけてあげる。

「すみません、妹がご迷惑を……」

「大丈夫ですよー。これぐらいならかわいいもんですって。私の友達なんか、トイレから出てこないとか、道端で寝ちゃうとか、結構はちゃめちゃなんで」

「わ、それは……大変ですね」

その光景を想像したのか、ラナは思わず苦笑い。

「……あの、少しお話、よろしいですか？」

「え？　はい、どうぞ」

ラナが手近な椅子に座った。その表情はずいぶんと真剣である。

「……ミユキさんは、ブリュスを奪還できるとお思いですか……？」
「ブリュスを、ですか？」

「はい」

ラナはブリュスの領主代行と聞いた。気になるのも仕方ないだろう。

正直な話、現在の戦力でブリュスを奪還できるとは思えない。兵

力差がありすぎる。住民反乱や敵軍の内応などが重なれば、ひよつとしたら可能かもしれない、というレベルだと思う。ラナには悪い気がするが、正直に言ったほうがいいだろう。

「……今の兵力じゃ厳しいと思います。ラナさんは経験でわかってらっしゃると思いますけど、攻撃三倍の法則という言葉があります。攻める側は守る側の三倍の兵力を持っていかないと勝てない、そんな意味の言葉です」

「あ、そんな言葉があるんですか。確かにそうですね、守りを固めている相手にぶつかるんなら、それぐらいの兵力は持っていないとダメですからね」

「こちらの兵力はせいぜい五千強。こちらが攻めていったら、敵軍は籠城するでしょうから、たったこれっぽっちの兵力で落とせるとは思えません」

「……やはり、ミユキさんもそうお考えですか。いくら援軍があつたところで、こちらの兵力は一万もいかないでしょうから……」

「……あ、でも、住民反乱や敵軍の内応なんかがあれば、ひよつとしたら……」

「ふふ、気休めは結構ですよ。敵軍の結束力は、私がよく知っていますから」

ラナが自嘲気味に笑った。フィリップは「ラナは優秀な武将」と言っていたが、彼女の語り口はずいぶんと謙遜しているようだ。

「フィリップ様もそう仰られてました。私も同感です。ですが……」
ラナの表情が曇る。

「私の姉、マリオン・ユーティライネンは中央で大きな力を持っています。姉はブリュスの奪還にこだわるでしょう。父がブリュスを守り抜いて死んだところを見えていますから……」

「お父さんを、ですか」

「はい。私達の父、カール・ユーティライネンは、今から十五年前、まだ私が幼い頃に、ハイランドの大軍を食い止めたのです。私はまだ六つでしたので、細かいことは覚えていないのですが、姉はもう

十歳になっていました。……ですから、父の戦いをよく覚えているのでしよう。姉のブリュスへのこだわりは、妹である私から見ても、明らかに強すぎます。無茶な命令も出してくるかもしれません」

ラナの口調には、どこか哀れみが混じっていた。

確かに、マリオンの気持ちもわからなくもない。父が命を懸けて守り抜いた土地を、敵に明け渡したままではいられないだろうから。「……私が至らないばかりに、ブリュスは奪われ、数多くの命が失われました。私の、私のせいで……」

ラナの声が震えだした。

戦いが終わり、こうして一息ついたことで、後悔と自責の念が押し寄せてきたのだろう。ラナは下唇を噛んで、拳を握り締めている。

「……ラナさん、悔しいんですか？」

「……そうですね。何も、何もできなかった自分が悔しくて……」

ラナの気持ちを考えて、深雪は言葉を詰まらせた。今の話を聞くだけで、彼女の責任感を感じることができる。

「父の武名を継ぐべく、私はひたすらに軍学を学んできました。実戦も何度か経験しましたし、勝利も納めてきました。周囲から褒められて、いい気になっていたんです。それなのにこの体たらく、情けないし、悔しいんです……」

割と自由奔放に見えるキーラとはずいぶんと違う感じた。本人の性格か、それとも次女という立場がそうさせているのか。

「……ごめんなさい、ちょっと、話しすぎちゃいましたね」

ラナが申し訳なさそうに笑った。少し涙混じりの口調だが、さっきよりは楽になったようだ。気が晴れたように思える。

「……いえ、ラナさんのガス抜きになれたんならいいですよ。話ならいつでも聞きますから、一人で溜め込まないでください」

悩みは誰かに話すだけでも、少しは晴れる。仕事が忙しいわけもないので、話し相手にならいつでもなれる。

「……あと、ラナさん。自分の弱さに涙を流せる人は、必ず成長します」

「ミユキさん……」

「……えへへ、恩師の受け売りですけどね」

中学二年生の頃、中体連新人戦の県大会でのこと。準々決勝にて、先鋒だった深雪は引き分け。次鋒、中堅は負け。勝敗の掛かった副将戦にて、千歳は数度の好機を活かせず引き分け。大將は勝利したが、結局は二対一で敗退してしまった。

そのとき、責任を感じて号泣していた千歳に顧問がかけた言葉が、深雪が先程口にした言葉である。その言葉で千歳は奮起し、彼女の頑張りにチームも引っ張られ、夏季大会では県ベスト四に入ることができた。深雪にとっては、非常に貴重な経験となったのである。

「ラナさん、あたしも一緒に頑張ります。いろいろ考えてみます。ハイランド軍を一泡ふかせないことには、この戦争は終わりそうもないですから」

一撃講和の望みは薄い。それでも、可能性がある限りはそれにすがりたい。山本五十六の気持ちに少しわかった。

「……はい、一緒にがんばりましょう！」

ラナは笑顔を浮かべると、深雪の手を握ってきた。この人とはうまくやれそうな気がする。

幼い領主、そして美しい姫将軍。

力を貸してあげたい人が、一人増えた。

#5・姫將軍の憂鬱（後書き）

キーラ・ユートイライネンだよ。

ラナ姉とも無事合流できたし、今から逆襲の始まりだよ！

次回から僕が大活躍！ うなれリルドラケン（剣の名前）！
そして美少年との出会い！ 心ときめく恋愛模様！！

……え？ 違うの？

きっとそんな展開のほうがいいと思うけどなあ。

――

盆までには続き上げると言いながらこの体たらくですよ。
別の話に注力しすぎてました。

次回は一ヶ月以内を目標に……。

#6・赤い虎と白い兎

くカレワラ

深雪はカレワラ城内を走っていた。昼過ぎから軍議があるのとこので、深雪も呼ばれていたのだが、昼食後のミカとの雑談が長引いたおかげで、時間ギリギリになってしまった。

「すみません、遅れましたッ！」

会場となっているフィリップの部屋に入ると、中にはフィリップにラナ、それにキーラとアドルフがいた。カレワラの指揮官勢揃いといったところか。少々場違いな気もするが、呼ばれたものは仕方ない。

「もー、ミユキ、遅いよー。どーせミカ君といちゃいちゃしてたんでしょー。うらやま……いや、うらやま……いや、羨ましいなあ」

「……キーラ、本音を隠せていませんよ」

「いちゃいちゃもしてませーん。残念でしたー」

ラナの咳払いと深雪の返答で、キーラはイタズラっぽく舌を出した。羨ましく思っているのなら混じればいいのに、と思うが、彼女にも仕事があるのだろう。

「で、ミカ君は？」

「今はサビーネさんところ。聞きたいことがあるんだって」

「ちえー。あたしに聞いてくれればいいのにー」

「キーラはカレワラの内政は知らないでしょう。ブリュスのすら把握してなかったのに」

「まあ、勉強しておくことだな。……よし、全員揃ったか。君らを集めたのは他でもない」

フィリップの声で、キーラの表情が真面目になった。その場の全

員がフィリップのほうを向く。話の内容は想像がつく。おおかた午前中にミカのところへ飛び込んできたことだろう。

「ミカにはすでに情報が上がっているが、中央で和平交渉が始まったとのことだ」

「和平ですか!？」

予想通り。だが、初めて聞いたであろうアドルフの声が上擦った。ハイランド軍の目的はソプニカ地方の併合のはず。それがブリュスの獲得だけで済むとは思えないようだ。深雪も第一報を聞いたときは驚いたものだ。

「ああ。どういう条件でその話を進めているのかはわからん。ともあれ、しばらく戦闘行動は慎まねばならんな」

「でも、なんで今になって和平を結ぼうとしてるのかなー？」

「……おそらく、冬になるからでは？　ブリュスを奪ったことで、ソプニカへの橋頭堡を確保することには成功していますから」

「うむ。おおかたアドルフの言う通りだろうな。いつでもカレワラは落とせる。そんな勢いで交渉に望んでいるだろう」

ここで和平が成立し、冬を越せばどうなるか。

一時の平和が訪れるものの、春になればきつとまた、別の言いがかりをつけて攻め込んでくるだろう。そうなれば、勝ち目はまずない。出血を賄う能力では、国力で勝るハイランド軍のほうが遙かに上だ。

「ここで和平だと、完全にハイランドの思惑通りになるように思えますね。不利な冬さえ越せば、敵さんはコッチをどんなふうにも料理できそうなものですから」

「私もミュキさんと同じ考えです。このまま冬まで持ち込んで、ひたすら時間を稼げば、少しはいい条件で交渉できそうですね。今じゃ向こうの言いなりにしかならないと思います」

「俺も二人の意見には賛成だ。だが、時間を稼ぐだけでは足りん。ソプニカとは戦えない、そう思わせるような勝利を得る必要がある。……話を戻そうか。今日集まってもらったのは、これからのことを

どうするか、話し合っておこうと思っただけな」

「これから？」

「ああ。和平が成立すれば、俺達の出る幕はない。だが、和平が決裂したときは、今のうちに考えておかねばならん」

和平が決裂。その言葉を聞いたラナは少し俯いた。おそらくは姉マリオンのことだろう。彼女はハイランド軍を強く憎んでいると聞いた。

諸侯連合という形から、中央は合議制と思われる。また、ほとんどの諸侯は対岸の火事と受け取っていいそう。援軍を禁止したことが何よりの証。本気でハイランドを撃退するつもりがあるのなら、緒戦のブリュス戦で各地から援軍が動いていたはずだ。諸侯は適当な条件で和平を結び、自分の領地は戦火に巻き込まれず、力を温存したいのだろう。この判断が誤っているとは言い切れない。絶対王政、ましてや封建制ですらないのだから、寄せ集めであるソプニカ諸侯連合がこうなるのは火を見るよりも明らかだ。

そんな状況でも、ハイランド軍を強く憎むマリオンがうまく扇動を行えば、和平がどうなるかは彼女の力量次第。

ともあれ、現状では不利な条件で和平を結ばざるを得ないだろう。それを嫌う諸侯がいてもおかしくはない。交渉の結果は簡単には読めなさそう。

「エピソードは一進一退のことだ。陽動目的だろうが、それにしても明らかに手を抜いているな。エピソードを攻めているハイランドの指揮官はモルドフ。寒国の狂犬とまで呼ばれた男だ。エピソードを守っているニルス殿には悪いが、役者が違う。それがここまで手こずっているんだ。おおかた、自分の兵力を温存しておくつもりだろうな」

「あれ、エピソードにはご子息が居られませんでしたか？」

「ああ。見聞を広めてもらおうと思って送り出したんだが、こんなことになるとはな」

「「ご子息？」」

キーラと深雪の声が重なる。フィリップに息子がいたとは初耳だ。フィリップに妾はいないようだから、おそらくはララとの子供だろう。となれば、結構な色男のはず。

「養子だよ。ララは子供ができない体のようだな。……話を戻そうか」

フィリップは少し恥ずかしそうだ。この時代なら、子供ができるかできないか、ということは重要なことに思える。子供ができない代わりに養子をとってまでララを妻としているとは、よほど彼女のことを愛しているのか、それともよほどの事情があるのか。

ララとの関係がなんだか気になってきた。後で聞いてみよう。

「和平交渉が決裂した場合、連中の目標は間違いなくカレワラだろう。その際の戦術案だが……」

フィリップは机に地図を広げ、ラガド街道を指差した。

「正面からの戦闘は避ける。敵の先頭と脇腹に奇襲をかけ、敵の列を分断する。その際に優先するのは敵兵士よりも物資だ。特に食料を優先的に燃やせ。その後、敵が疲れるまで反復して攻撃を加える。敵が反撃してきた場合は、森の中に逃げ込んで、逆に狩ってやれ。反撃してくる気力もなくなった頃に、一斉に攻撃を仕掛け、各個殲滅する。……何か質問や意見は？」

深雪は寒気を覚えた。フィリップが言っていることはモッティ戦術そのものだ。以前は「森林中から奇襲を仕掛け、敵を分断する」と、さわりしか説明していなかったにも関わらず、それだけで理解してしまったとは。

「ミュキ殿、貴女の言葉を参考にさせてもらったよ」

「い、いえ。まさかここまで理解されてるとは……。あたしの出る幕がないじゃないですか」

「ははは、年の功だ。だが、この発想はなかった。貴女の説明があったこそだ」

フィリップから持ち上げられているのがなんだかこそばゆく、思わず頬をかく深雪だった。

「えっと、森の中での戦闘はこちらに分が？」

「ああ。カレワラの兵士は獵師あがりの者が多い。ここらの森は庭のようなものだ」

「……あれ？ カレワラの兵士は傭兵では……」

ラナの問いかけは不思議そうだ。ソプニカ地方は傭兵で戦争をするのが主流のようである。それならば、兵の少なさにも納得がいく。「無論、半分は傭兵だ。だが、この戦争が始まってから、兵に志願する者が多くてな。珍しいことだが、助かっているよ」

ひよつとすると、まだこの世界には国民軍という発想がないのかもしれない。だとすれば、他の軍よりも一歩前に立てるかも。

「俺もできることなら正面から戦いたい。だが、数に差がありすぎる。質では負けていないが、これだけの兵力差を覆えるとは思えん」

「……拙者は異議なし。フィリップ殿の案が最善と思います」

「僕も代案は浮かばないなあ。ラナ姉とミュキは？」

「こうやって時間を稼ぐしかないというのが悔しいですね……。ですが、やれるだけのことはしませんと」

「あたしも特に口出しはできそうにないです」

「では、もしも和平交渉が決裂したら、この作戦でいく。各自、よく覚えておくように」

フィリップの声で、ラナ達は敬礼をした。自分だけやらないのもどうかと思い、深雪も見よう見まねで敬礼。

「では解散。時間を取らせて悪かったな」

解散の号令で、ラナとアドルフは部屋から出ていった。慌ただしそうな足取りだ。何かやりかけの仕事でもあったのだろうか。

「……ねえ、ミュキ。あの二人、怪しいと思わない？」

二人が出ていった後、キーラが小突いてきた。

「ラナさんとアドルフさん？」

「そうそう。ほら、いつも一緒にいるじゃない。確かにアドルフはラナ姉の教育係だったけど、もうそういう年じゃないし……」

「こら、噂話は控えておけ」

「あたっ」

フィリップがキーラの頭をはたく。

「ラナ殿は色々勉強している。お前も見習え、キーラ」

「ちえー」

「……あ、そうだ。フィリップさん、一つ意見いいですか？ 今回の作戦とは関係ありませんけど」

「む？ ……ミユキ殿の話はためになる。聞かせてもらおうか」

「僕もいい？」

「まあ、聞かれて困るものじゃないからね。……徴兵のことです」
「徴兵？」

「はい。今は傭兵が兵士の半分を占めている、って言われてたじゃないですか。いい機会ですから、傭兵の比率をちよっとずつ下げていって、兵士を志願制にしてはどうでしょうか？」

「え、でも傭兵さんのほうがすぐ戦力になるよ？」

「確かにそうね。だけど、肝心の時に傭兵は頼りになる？ 戦況が

ヤバくなったら、傭兵は逃げるものでしょ？」

「……うーん。確かに、こないだのブリュス戦でも、最後まで残ったのは職業軍人ばっかだったなあ……」

「元傭兵としては耳の痛い言葉だ。だが、確かにな。傭兵は生き残るのが第一だ」

「あ、なんかすみません。……さっき、戦争が始まったら、兵士に志願してきた人が多いって言われてたじゃないですか。そういう人達は、愛国心っていうか、カレワラを大事に思ってるってことでしょ？ ですから、危なくなっても粘るれんです。大事なところを失う訳にはいけないから」

守るべきものがある人間というのは強い。太平洋戦争末期の防衛戦を見ていても、それは明らかだ。

「カレワラは獵師が多いって言われてたじゃないですか。弓矢の扱いはお手のものでしょうか？ そういう人達がカレワラを守るために兵士に志願してくれれば、きっと心強いと思います。金で雇われた

傭兵よりも、無理矢理引っ張ってこられた兵士よりも。あたしが言いたかったのは、そんなところですよ」

武器とナシヨナリズムを持った国民は恐るべき軍隊となる。それは、ナポレオン戦争が証明していることだ。

「ふむ……。確かにカレワラの人間は幼い頃から弓矢を扱う。他の都市の人間よりは即戦力になり得るな。いや、興味深い話を聞かせてもらった。ありがとう」

「礼なんかいですよ。たまにはこうやって仕事しないと。……。あ、一つお願いしてもいいですか？」

「お願い？　できるかぎり聞こう」

「ララさんの馴れ初め、教えてくださいっ!!」

「なんだ、そんなことか……。って、何イ!？」

驚くフィリップに、目を輝かせるキーラ。

「いやあ、ララさんがフィリップさんの奥さんだってことを知ってから、ずーっと気になってたんですよ。ララさん、ちょっと変わってらっしゃるじゃないですか」

ちよつとどころか、だいぶ変わっていると思うが、フィリップの前なので少し控えておく。

「……ま、できればいいですけど」

フィリップはしばらく考えて、ため息をついた。

「……やれやれ、しょうがないな。ミュキ殿にはこれからも知恵を貸してもらわなければならんしな。ここだけの話だぞ？」

「よし、交渉成立ですねっ!」

「やった!」

「……キーラもか。まあ、一人も二人も同じか」

フィリップは苦笑して、手近な椅子に座った。立ったまま話を聞くのもなんなので、手近なソファアにキーラと並んで座る。

「俺は若い頃、傭兵稼業を始める前は結構やんちゃをしていてな。まあチンピラだった」

「え、あんまり想像つかないなあ……」

「うん。フィリップさん、紳士的だもんね」

「褒めても何も出ないぞ。それで、ある時に引き受けた仕事^ぜが、女^{げん}衛の護衛だった。買われてきた女が逃げないよう、部屋の見張りだな。そりゃ嫌な仕事だったよ。一日中、背中のドアからは泣き声が聞こえてくるんだからな」

当時のことを思い出したのか、フィリップは顔をしかめた。よほど嫌な経験だったようだ。

「俺が中に入るのは、食事を持って行くときだけだった。そのときいた女のなかで、とびきり美人がいた」

「それがララさん？」

「……ああ」

フィリップが恥ずかしそうにはにかむ。しかし、フィリップが若い頃というと、ララは子供なんじゃないのか。ひょっとして、ロリコンの気があるのだろうか。

「あいつはのんびりしてるが、それはあの頃も変わらなくて、ずっとぼんやりしていた。食事も手をつけずに、他の女に食われてたしな。そのときは『鈍くさい奴だな』って思ってたが、だんだん気になってきてな。次第に直接食事を与えるようになった。ララも俺に懐いてきてな。信じられないかもしれないが、あいつは昔から容姿が変わっていいんだ。化粧の有無以外は今と同じ。美人から懐かれるんだ。悪い気はしなかったよ。まあ、子供みたいな奴だけだな」

「ってことは、ララさんは老けないってことですか？」

「その通り。なぜかはわからん。だが、本当に老けていないんだ」

ララは老けないということで、前言撤回。普段ならあり得ない話と一蹴しそうだが、この世界にはセシリアなんて神様がいるんだ。何があっても不思議ではあるまい。

「ララと一言二言話するのが楽しみになったが、それでも嫌な仕事だってことに変わりはない。それで、こんな仕事をやってる自分が嫌になってきてな。このままこの仕事を続けてたら、俺はずっと自分を嫌いでい続けなきゃならない。それに女衛の奴も嫌な奴だっ

た。ネチネチと文句ばかり言うわ、報酬は値切るわ。俺は限界に来たから、女衒を殺して、女を逃がして、店に火を点けた。契約違反は悪いことだと思ったが、俺はもう少し自分に優しくいたかったかな」

「うわ、めちゃくちゃやってるじゃん……」

さすがのキーラも引いている。確かにいくら頭に來たとはいえ、やりすぎな気もしないではない。女衒に買われた女を逃がするという行為自体は、多少褒められそうだが。

「やんちゃをやったと言っただろう。それで、その時に逃げたのがきっかけで、ララと一緒にになった。あいつは放っておいたらのたれ死にそうだからな。放っておけなかったんだ。それに、子供みたいで面倒くさい奴だが、一緒にいたら不思議と落ち着く。凄く居心地が良くてな……。って、これじゃ惚気か」

「でも、そんな無茶して、何もされなかったんですか？」

「女衒は嫌な奴だったって言ってただろう？ 恨みはたくさん買ってたし、俺も有力な傭兵団に拾われてな。結局、大した犯人探しもなく、みんな忘れていったよ。傭兵稼業を始めたのはそのときからだ。……馴れ初めというよりは、昔話だな。これで満足か？」

「まあ、割と」

思っていたのとは少し違うが、それでもなかなか面白い話が聞けた。ひとまず満足だ。

「僕は新婚時代の話も聞きたいなあー」

「それはキーラが活躍してからだな」

「ちえー」

キーラがふてくされる気持ちもわかる。子供っぽいララのことだ。色々面白い話があるに違いない。

しかし、フィリップはずいぶんと尖っていたようだ。今じゃ随分と紳士的だが、これは猫を被っているのか、それともララとの暮らして丸くなったのか。個人的には後者であってほしい。

「フィリップ、きて」

噂をすればなんとやら、ララがノックもせずに入ってくる。

「おい、仕事申中だと言っているだろうが」

フィリップは口でこそそう言っているが、表情は少し緩んでいる。
「すまん、野暮用だ」

「あー、はい。わかってますよ」

「ごゆっくりどうぞー」

フィリップは照れくさそうにしながら、ララの手を取る。知り合
って長いようだが、仲は良好なようだ。キーラと一緒にフィリップ
の部屋を出て、部屋の鍵を閉める。

「みゆき、キーラ、またね」

「あ、はい。お疲れさまです」

ララはこちらに手を振ると、フィリップと一緒に屋敷の奥へ消え
ていった。部屋の衛兵に頭を下げて、深雪達も廊下を歩く。

「いやー、こんなお昼からねえ」

仲がいいのは結構なことだが、ずいぶんとお盛んなようだ。

「でも、いい時間だよ？」

「え、真っ昼間でしょ？」

「小腹空かない？ おやつの時間だよ」

おやつ。確かに昼食から少し時間が経って、腹も少し軽くなった。
だが、深雪にその発想はなかった。深雪が思い描いていたのは、
もっとこう、大人の時間。

「……ミユキ、どしたの？ 頭なんか抱えて」

「……いやー、あたし、汚れてるなあって……」

「?? まぁいいや。ミカ君とこ行って、おやつでもたかろうよ」

「……うん。それもそうね」

深雪は少し自己嫌悪しつつ、キーラと一緒にミカの部屋に向かう
のだった。

#6・赤い虎と白い兎（後書き）

ララ。

……

……

……（こくりこくり）

……ねてた。

――

ララとフィリップの話は、機会があればじっくり書いてみたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5590t/>

ジャージを着た女神

2011年9月21日03時25分発行